埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第368集

久 喜 市

上 早 見 新 田 西 遺 跡

地特（改築）工事（六万部久喜停車場線）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

２０１０

埼 玉 県
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県では、「誰もが安心して暮らせる安心・安全　埼玉」を目指し、人々の豊かな交流や活発な経済活動を支える道路網の整備に努めています。道路網は骨格となる幹線道路の整備とともに、渋滞緩和のために市街地を迂回する道路の整備を推進しています。

一般県道六万部久喜停車場線（バイパス）は、既存路線の交通渋滞を緩和し、円滑な交通と安全を確保するために計画され、整備が進められています。

事業地内には縄文時代の遺跡の存在が知られていました。その取扱いについては、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が関係諸機関と慎重に協議を重ねてまいりましたが、やむを得ず記録保存の措置が講じられることとなりました。発掘調査は埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、縄文時代後期の竪穴住居跡とともに、近世の溝跡が発見されました。縄文時代の竪穴住居跡や土壙などは狭い範囲に密集してみつかり、地域の歴史に貴重な資料を追加することができました。

本書は、これら発掘調査の成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護、普及・啓発の資料として、また、学術研究の資料として広く活用いただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、埼玉県県土整備部道路街路課、杉戸県土整備事務所、久喜市教育委員会並びに地元関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成22年１月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理　事　長　刈　部　　博

例 言

1．本書は、埼玉県久喜市に所在する上早見新田西遺跡第１次調査の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

上早見新田西遺跡第１次（ＫＭＨＹＭ）

埼玉県久喜市大字上早見字新田489－18他

平成20年１月15日付け　教生文第２－55号

3．発掘調査は、地特（改築）工事（六万部久喜停車場線業務委託）に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、埼玉県県土整備部道路街路課の委託を受け、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．発掘調査・整理報告書作成事業はⅠ－３の組織により実施した。発掘調査については、平成20年１月４日から平成20年２月15日まで実施し、礒﨑　一・新屋雅明が担当した。

また、整理報告書作成事業は、平成21年10月１日から平成21年11月30日まで、西井幸雄が担当して実施し、平成22年１月29日に財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第368集として印刷・刊行した。

5．発掘調査における基準点測量は、株式会社ＧＩＳ関東に委託した。

6．発掘調査における写真撮影は礒﨑・新屋が行い、出土遺物の写真撮影は西井が行った。

7．出土品の整理・図版作成は西井が行い、新屋雅明、上野真由美の協力を得た。

8．本書の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課、Ⅰ－２・３、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ－２、Ⅴ－１を西井、Ⅳ－１、Ⅴ－２を上野が行った。

9．本書の編集は西井が行った。

10．本書に掲載した資料は平成22年２月以降埼玉県教育委員会が管理・保管する。

11．発掘調査、本書の作成にあたり、久喜市教育委員会からご教示・ご協力を賜った。記して感謝いたします。

上早見新田西遺跡の紹介

上早見新田西（かみはやみしんでんにし）遺跡は、JR宇都宮線・東武伊勢崎線の久喜駅から北東約2.5㎞にある、縄文時代後期（今から約4,000年前）の遺跡です。

今は田んぼになっていますが、縄文時代の人々が生活を営んでいた当時は台地で、高台になっていました。長い年月のなかで、地形が大きく変わったことが分かりました。

今回の調査でムラの一部が検出され、住居跡や土壙（どこう）（大きな穴）が見つかっています。土壙の幾つかは、食糧などを貯えるために使われたと考えられ、中から称名寺式（しょうみょうじ）と呼ばれる土器が見つかりました。

凡 例

1．遺跡全体におけるＸ・Ｙの数値は、世界測地系（新測地系）による国土標準平面直角座標第Ⅸ系（原点：北緯36°00′00″、東経139°50′00″）に基づく座標値を示し、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

　遺跡のＥ－６グリッド北西杭の座標は、Ｘ=7890.000ｍ、Ｙ＝－15890.000ｍ。北緯36°04′15″、東経139°39′24″である。

2．調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10ｍ×10ｍの範囲を基本（１グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3．グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（Ａ・Ｂ・Ｃ…）、西から東方向に算用数字（１・２・３…）を付し、アルファベットと算用数字を組み合わせ、例えばＥ－６グリッド等と呼称した。

4．本書の本文、挿図、表中に記した遺構の略号は以下のとおりである。

ＳＪ…竪穴住居跡　SK…土壙　SD…溝跡

Ｐ…小穴・柱穴

5．本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もある。

全測図　１：300

遺構図　１：60　1：80

縄文土器・土師器・陶磁器など　１：４

土器拓影図　１：３

石器　２：３　１：３

古銭　１：１

木製品　１：３　１：４

6．遺構断面図に表記した水準数値は、海抜標高を表す。

7．本書に使用した地形図は、国土地理院発行1/25000・1/50000地形図、久喜市都市計画図1/2500を使用・編集した。

目 次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至る経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・報告書作成の組織 …… 2
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 3
　1．地理的環境 …… 3
　2．歴史的環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概要 …… 7
Ⅳ　遺構と遺物 ……10
　1．縄文時代 ……10
　（1）住居跡 ……10
　（2）土壙 ……19
　（3）グリッド出土遺物 ……27
　2．近世 ……35
　（1）溝跡 ……35
　（2）グリッド出土遺物 ……36
Ⅴ　調査のまとめ ……38
　1．調査の成果 ……38
　2．縄文時代後期初頭の出土土器について…38
写真図版

挿 図 目 次

第1図　埼玉県の地形 …… 3
第2図　周辺の遺跡 …… 5
第3図　遺跡位置図 …… 8
第4図　遺跡全体図 …… 9
第5図　第1号住居跡 ……11
第6図　第1・2号住居跡出土遺物 ……12
第7図　第2号住居跡出土遺物 …… 12
第8図　第2号住居跡 ……13
第9図　第3号住居跡 ……15
第10図　第3号住居跡出土遺物……16
第11図　第4号住居跡出土遺物……16
第12図　第4号住居跡……17
第13図　第5号住居跡……18
第14図　第5号住居跡出土遺物……18
第15図　土壙……20
第16図　土壙出土遺物（1）……22
第17図　土壙出土遺物（2）……23
第18図　土壙出土遺物（3）……24
第19図　土壙出土遺物（4）……25
第20図　グリッド出土遺物（1）……28
第21図　グリッド出土遺物（2）……29
第22図　グリッド出土遺物（3）……30
第23図　グリッド出土遺物（4）……31
第24図　グリッド出土遺物（5）……32
第25図　グリッド出土遺物（6）……33
第26図　グリッド出土遺物（7）……34
第27図　第1号溝跡……35
第28図　第2号溝跡……36
第29図　溝跡・グリッド出土遺物……37
第30図　後期初頭の土器群 ……39

表 目 次

第１表　遺跡一覧表 ……６
第２表　第１号住居跡ピット一覧表 ……10
第３表　第２号住居跡ピット一覧表 ……14
第４表　第３号住居跡ピット一覧表 ……16
第５表　第４号住居跡ピット一覧表 ……16
第６表　第５号住居跡ピット一覧表 ……19

写 真 図 版 目 次

図版１　１　調査区全景
　　２　第１号住居跡
図版２　１　第２号住居跡
　　２　第３号住居跡
図版３　１　第４・５号住居跡
　　２　第３号土壙
　　３　第10・11・12号土壙
　　４　第13号土壙
　　５　第１号溝跡
図版４　１　第１号土壙出土遺物（第16図13）
　　２　第２号土壙出土遺物（第18図１）
　　３　第２号土壙出土遺物（第18図２）
　　４　第３号土壙出土遺物（第18図７）
　　５　第３号土壙出土遺物（第18図８）
　　６　グリッド出土遺物（第25図309）
図版５　１　第１・２号住居跡出土遺物
　　２　第３号住居跡出土遺物
図版６　１　第４・５号住居跡出土遺物
　　２　土壙出土遺物（１）
図版７　１　土壙出土遺物（２）
　　２　土壙出土遺物（３）
図版８　１　グリッド出土遺物（１）
　　２　グリッド出土遺物（２）
図版９　１　グリッド出土遺物（３）
　　２　グリッド出土遺物（４）
図版10　１　グリッド出土遺物（５）
　　２　グリッド出土遺物（６）
図版11　１　グリッド出土遺物（７）
　　２　グリッド出土遺物（８）
図版12　１　溝跡出土遺物（第29図５）
　　２　溝跡出土遺物（第29図６）
　　３　溝跡出土遺物（第29図７）
　　４　溝跡出土遺物（第29図８）
　　５　溝跡出土遺物（第29図９）
　　６　溝跡出土遺物（第29図10）
　　７　溝跡出土遺物（第29図11）
　　８　グリッド出土遺物（第29図12）

Ⅰ　発掘調査の概要

１．発掘調査に至る経過

埼玉県では、円滑な道路交通を実現させるため、体系的な道路網の整備と総合的な交通渋滞対策を推進している。本報告書に係る一般県道六万部久喜停車場線バイパスは、既存路線の円滑な交通と安心安全な道路空間を形成するためのバイパス建設及び歩道整備として計画されたものである。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、県が実施するこうした公共開発事業に係る埋蔵文化財の保護について、従前より関係部局と事前協議をかさね、調整を図ってきたところである。

当該道路事業に先立ち、杉戸県土整備事務所長から平成19年６月28日付け杉整第445号で、埋蔵文化財の所在の有無及び取扱いについて、生涯学習文化財課長あて照会があった。

それに対して生涯学習文化財課は、平成19年10月10日～12日に遺跡所在及び範囲等確認のための試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が明確になったことから、平成19年10月22日付け教生文第1600号で次の内容の回答を行った。

1　埋蔵文化財の所在

名称（No.）	種別	時代	所在地
上早見新田遺跡（No.79-053）	集落跡	縄文後期	久喜市大字上早見字新田408ほか
上早見新田西遺跡（No.79-054）	集落跡	縄文・江戸	久喜市大字上早見字新田489-18ほか

2　法手続

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事着手に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3　取扱い

別図「発掘調査を要する区域」について、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

同「工事に着手して差し支えない区域」については、工事中に新たに埋蔵文化財を発見した場合は、直ちに工事を中止して、取扱いについて埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課と協議してください。

杉戸県土整備事務所と生涯学習文化財課・久喜市教育委員会は、その取扱いについて協議を重ね、現状保存は困難であることから記録保存の措置を講ずることになった。その後、発掘調査実施機関である（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、杉戸県土整備事務所・生涯学習文化財課の三者で工事日程、調査計画、調査期間などについて協議した。

文化財保護法第94条１項の規定による埋蔵文化財発掘通知が埼玉県知事から提出され、同条第２項の規定により、記録保存のための発掘調査を実施するよう埼玉県教育委員会教育長から通知した。その後、第92条第１項の規定による発掘調査届が（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出され、発掘調査が実施された。

発掘通知及び発掘調査届に対する県教育委員会教育長からの勧告及び指示通知は次のとおりである。

発掘通知に対する勧告

平成20年１月25日付け教生文第３－938号

発掘調査届に対する指示通知

平成20年１月15日付け教生文第２－55号

（埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

上早見新田西遺跡の発掘調査は、平成20年１月４日から平成20年２月15日まで実施した。調査面積は882㎡である。

１月から重機による表土の掘削を開始し、発掘事務所を設置した。１月後半から人力による遺構の確認作業に入り、１月下旬に基準点測量を行った。確認された遺構は、順次精査を行い土層断面図、平面図等の記録を作成し、遺構の写真撮影を行った。

２月中旬、器材の撤収、発掘事務所の撤去を行い、すべての作業を終了した。

（2）整理報告書作成

整理報告書作成作業は、平成21年10月１日から平成21年11月30日まで実施した。

作業は出土遺物の水洗・注記を行なった後、接合・復元作業に着手した。接合・復元が終了した遺構から順次、実測遺物・土器破片を抽出し、遺物実測を開始した。遺物は機械実測（３スペースなど）を利用して素図を作成し、この素図をもとに実測図を完成させた。破片遺物は、断面実測、拓本作業を行った。実測図・断面図のトレース作業を行い、完了した遺構ごとに遺物図版組み作業を行った。

遺構図の作成は、遺物の作業と並行して行った。図面整理と修正を経て第二次原図を作成した。第二次原図はスキャナーでコンピューターに取り込んだ後、画像編集ソフトを用いて遺構図のトレース・土層説明等の入力データを組み込んで編集作業を実施し、遺構図版の版下を作成した。

11月には原稿執筆、遺物・遺構図面の割付に着手した。また遺構写真を選択し、遺物の写真撮影を行った後、写真図版の割付作業に着手し、コンピューター内で編集を行った。

11月下旬までに原稿執筆を終えて、編集作業を行った。11月下旬に印刷業者を選定して入稿した。校正は３回行い、平成22年１月下旬に報告書を刊行した。また図面類・写真類・遺物は整理、分類し、収納作業を行い、すべての作業を終了した。

3．発掘調査・報告書作成の組織

平成19年度（発掘調査）

理事長	刈部　博	**調査部**	
常務理事兼総務部長	岸本洋一	調査部長	村田健二
総務部		調査部副部長	礒﨑　一
総務部副部長	昼間孝志	調査第二課長	細田　勝
総務課長	松盛　孝	主査	新屋雅明

平成21年度（報告書作成）

理事長	刈部　博	**調査部**	
常務理事兼総務部長	萩元信隆	調査部長	小野美代子
総務部		調査部副部長	礒﨑　一
総務部副部長	昼間孝志	整理第二課長	富田和夫
総務課長	田中雅人	主査	西井幸雄

Ⅱ　遺跡の立地と環境

１．地理的環境

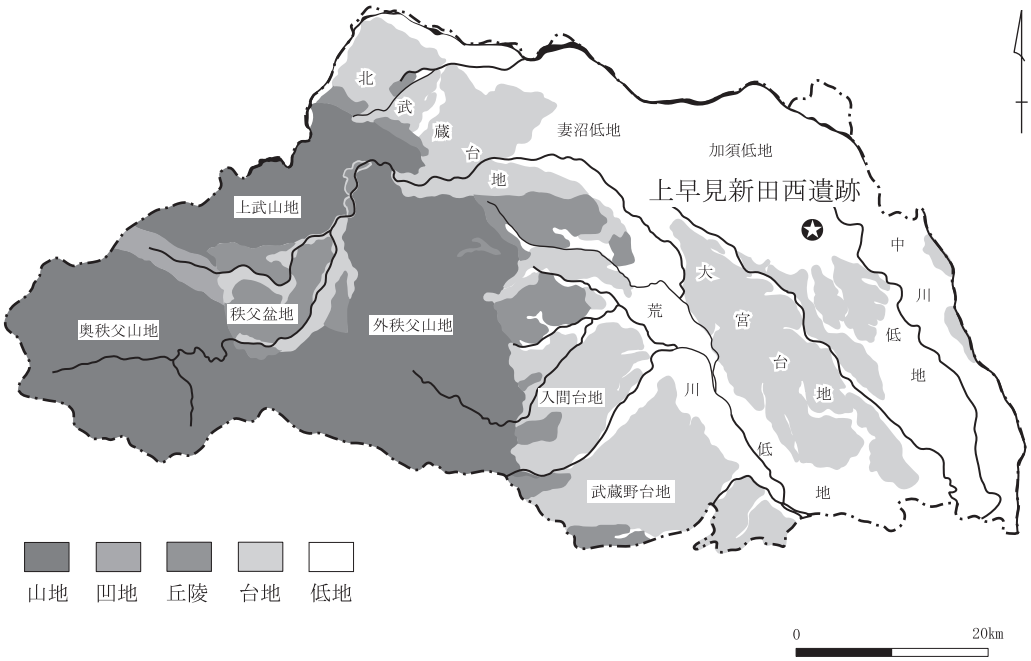
上早見新田西遺跡は、ＪＲ宇都宮線・東武伊勢崎線久喜駅の北東約2.5㎞に所在する。遺跡は、住宅街と水田面の境付近の、台地縁辺部に位置している。遺跡の標高は約９ｍで、南西側に水田が広がっている。

遺跡の所在する久喜市は、関東平野のほぼ中央で埼玉県の北東部、東経139°40′、北緯36°04′に位置する。市域は東西約8.6㎞、南北約6.2㎞、面積は25.03㎢である。

埼玉県北東部は、古利根川や渡良瀬川などの大河川が流れており、加須低地・中川低地と呼ばれる沖積低地が広がっている。しかし、現在みられる景観は、関東造盆地運動による地盤の沈降と、多くの河川による浸食と堆積によって形成されたもので、歴史的には比較的新しいことが、考古学・地質学の調査によって明らかになってきている。

今まで、沖積低地又は自然堤防と思われていた地域も細かくみると、地下にローム台地が埋まっている事が分かってきた。近年、旧石器時代や縄文時代の遺跡が新たに見つかっており、遺跡の分布の見直しが進められている。

上早見新田西遺跡で人々が生活を営んでいた縄文時代は、現在の地形とは大きく異なり、利根川は現在の荒川低地を流れ、その東側に大宮台地から館林台地、赤城山南麓までを結ぶ回廊状の地形が形成されていたことが分かってきた。また、遺跡の東側には、中川や江戸川が流れている。当該地域は、大宮台地と赤城山南麓を結ぶ中継地点として、空間的に重要な位置を占めていたと考えられる。



第１図　埼玉県の地形

２．歴史的環境

上早見新田西遺跡では、縄文時代と近世の遺構、遺物が検出された。特に縄文時代後期の竪穴住居跡が、狭い範囲に密集していた。

加須低地では旧石器時代の遺跡は、殆ど発見されていなかったが、近年、埋没ローム台地の調査が増加する中、幾つかの遺跡から石器群がみつかっている。久喜市足利遺跡（10）は本遺跡と比較的近距離にある。発掘調査は1972年に実施され、久喜市において旧石器時代の資料がみつかった先駆けである。しかし、石器集中等は検出されず、調査区の広範囲からナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石刃が出土した。菖蒲町九宮２遺跡（24）は、遺物の分布は散漫であるが石器集中が１箇所検出された。ナイフ形石器、掻・削器が出土している。同町神ノ木２遺跡（37）は、九宮２遺跡に続いて、当該地域で石器集中が３箇所検出され、遺物は113点出土した。出土層位は第Ⅴ層（第１暗色帯）中で、ナイフ形石器、掻・削器が検出された。石器石材は、チャートを主体に黒色頁岩、ガラス質黒色安山岩が用いられている。

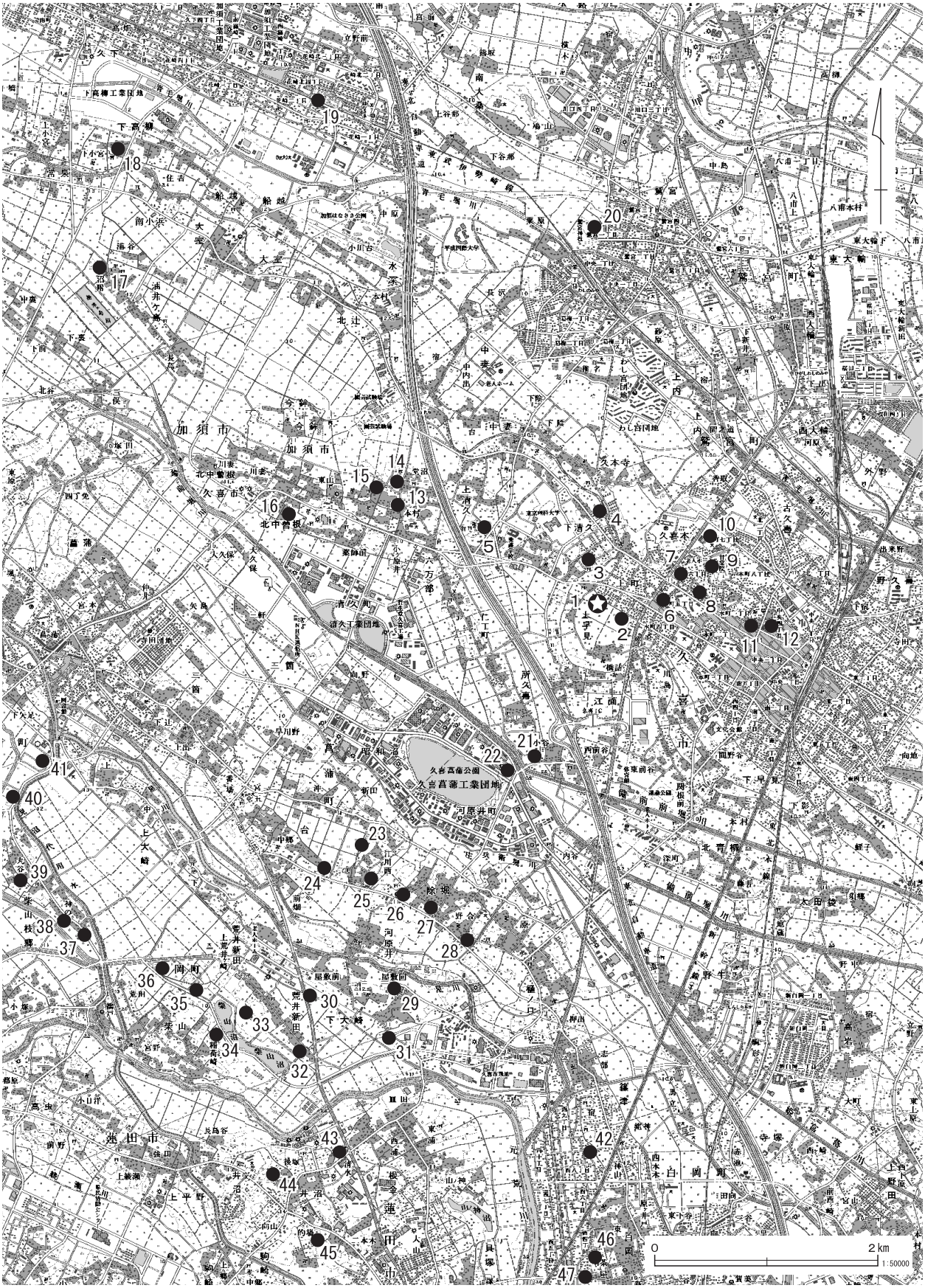
縄文時代の遺跡は、中期から後期を中心に多くの遺跡がみつかっている。上早見新田西遺跡の東側の台地部に足利遺跡（10）、道合遺跡（６）、道合中遺跡（７）、御陣山遺跡（12）、甘棠院西遺跡（８）、光明寺遺跡（11）などが近接して分布している。

各遺跡を概観すると、久喜市足利遺跡（10）では、縄文時代中期～後期の竪穴住居跡５軒が検出された。中期は加曽利Ｅ式期３軒、後期は称名寺式期の竪穴住居跡２軒である。グリッドからは、早期から後期の土器群が出土している。同市道合遺跡（６）第２次調査では、後期～晩期の土器が多量に出土している。竪穴住居跡は重複しており、柱穴の配列から５軒程度があったと想定されている。土器群と共に耳飾、土偶、土版、石版等が多数出土している。同市道合中遺跡（７）では、中期の竪穴住居跡が13軒検出された。同市御陣山遺跡（12）は、発掘調査が複数回実施されている。第２・３次調査の際、安行Ⅱ式期の竪穴住居跡が３軒検出され、土偶、耳飾、垂飾等が出土した。同市甘棠院西遺跡（８）は、中期と後期の竪穴住居跡が各１軒検出されたが、遺構の残存状況は悪い。同市光明寺南遺跡（11）は後期堀之内式期の竪穴住居跡が２軒重複していた。遺物はメノウ製の垂飾が出土している。

上早見新田西遺跡の南西側には、九宮１遺跡（23）、九宮２遺跡（24）、小林八束１遺跡（41）、小林八束２遺跡（40）、神ノ木遺跡（38）、神ノ木２遺跡（37）、皿沼遺跡（30）などがある。

菖蒲町九宮１遺跡（23）では、中期末加曽利Ｅ式の竪穴住居跡１軒が検出された。同町九宮２遺跡（24）では、後期堀之内２式期の竪穴住居跡３軒と埋甕６基が検出された。把手の付く蓋が第５号住居跡から出土した。埋甕は、称名寺終末期から堀之内１式の初頭の３基が台地上に比較的まとまり、堀之内１式古段階の３基が台地の斜面部にまとまって埋設されていた。同町小林八束１遺跡（41）では、後期堀之内２式期の竪穴住居跡２軒が検出された。竪穴住居跡は調査区の端に位置し、全体を調査することはできなかったが、第４号住居跡から筒型土偶の一種と考えられる、小型の土偶がほぼ完全な状態で出土した。同町小林八束２遺跡（40）では、狭い調査区の中に早期の炉穴群が４群（29基）検出された。炉穴からは、条痕文系土器群が出土している。

同町神ノ木２遺跡（37）は、中期の大形環状集落である。調査区は道路幅のため、集落の全体を調査していないが、環状集落の中央部を横断しており、竪穴住居跡108軒と掘立柱建物跡16棟が検出された。竪穴住居跡は複雑に重複しており、度重なる建替えがおこなわれていたと思われる。当該地域の拠点集落である。遺物は、多量の土器及



第２図　周辺の遺跡

び石器が出土した。特に第34号住居跡から、多くの深鉢土器と伴に、吊り手が付く土器、両耳壺、器台等が検出された。同町神ノ木遺跡（38）は神ノ木２遺跡の北側に近接している。後期称名寺式期と堀之内１式期の土壙群が検出されている。

白岡町皿沼遺跡（30）では、中期加曽利Ｅ式期の竪穴住居跡５軒と後期の称名寺式期から加曽利Ｂ式期の竪穴住居跡４軒が検出されている。

古墳群は、神ノ木遺跡（38）と神ノ木２遺跡（37）が柴山枝郷古墳群を形成している。円墳跡３基と方墳跡２基が調査されている。神ノ木２遺跡では、第107号土壙から鉄製の剣、大刀、鎌と鉄鏃20本が副葬されていた。古墳時代の集落は、九宮２遺跡（24）、小林八束１遺跡（41）、皿沼遺跡（30）から竪穴住居跡が検出されている。

次に、中・近世の遺跡をみてみる。上早見新田西遺跡の東側に近接する足利政氏館跡（９）とその周辺の遺跡がまとまっている。道合中遺跡（７）は井戸跡から板碑、かわらけ、甘棠院西遺跡（８）は井戸跡から板碑、光明寺遺跡（11）は土壙から陶磁器類、御陣山遺跡（12）は井戸跡や堀跡から板碑が多数出土した。

第１表　周辺の遺跡一覧表

No.	遺　跡　名	市町村	時　代　・　時　期	No.	遺　跡　名	市町村	時　代　・　時　期
1	上早見新田西遺跡	久喜市	縄文（後）、近世	25	医王院遺跡	久喜市	縄文（中）、中世
2	上早見新田遺跡	久喜市	縄文（後）	26	江川東遺跡	久喜市	縄文（中）
3	宮浦遺跡	久喜市	縄文（後）	27	部井遺跡	久喜市	縄文（中・晩）
4	八幡台遺跡	久喜市	平安	28	不動寺遺跡	久喜市	縄文（中）、古墳
5	清久氏館跡	久喜市	縄文（前）、中世	29	天神山東遺跡	白岡町	縄文（早・前・中）
6	道合遺跡	久喜市	縄文（後）	30	皿沼遺跡	白岡町	縄文（中・後）、古墳（前）
7	道合中遺跡	久喜市	縄文（後）、奈	31	天神山遺跡	白岡町	縄文（早）、古墳（前）
8	甘棠院西遺跡	久喜市	縄文（中・後）	32	下荒井ヶ崎遺跡	白岡町	縄文（中・後）
9	足利政氏館跡	久喜市	中世	33	上荒井ヶ崎遺跡	白岡町	縄文（早・中）
10	足利遺跡	久喜市	縄文（早・前・中世・後）	34	柏崎遺跡	白岡町	縄文（中・後）
11	光明寺遺跡	久喜市	縄文（中）、近世	35	上荒井ヶ崎西遺跡	白岡町	縄文（早・中）
12	御陣山遺跡	久喜市	縄文（後・晩）、中世、近世	36	嶋岡遺跡	白岡町	縄文（前・中）
13	本村南遺跡	久喜市	平安	37	神ノ木２遺跡	菖蒲町	縄文（中・後）、古墳（中・後）
14	堂沼遺跡	久喜市	平安	38	神ノ木遺跡	菖蒲町	縄文（後）、古墳（後）
15	本村遺跡	久喜市	古墳（後）	39	丸谷下遺跡	菖蒲町	縄文（中）、古墳（前）、平安
16	館山遺跡	久喜市	中世	40	小林八束２遺跡	菖蒲町	縄文（早）
17	油井城跡	加須市	中世	41	小林八束１遺跡	菖蒲町	縄文（後）、古墳（前）
18	高柳氏館跡	加須市	中世	42	西下谷遺跡	白岡町	縄文（中）、古墳（前）
19	花崎城遺跡	加須市	平安	43	井沼遺跡	蓮田市	縄文（中・後・晩）
20	堀之内遺跡	鷲宮町	縄文（前・後）、古墳(前・中・後)	44	井沼遺跡・館跡	蓮田市	縄文（中・後・晩）、中世、近世
21	小谷遺跡	久喜市	平安	45	的場遺跡	蓮田市	縄文（中・後）、古墳、近世
22	中河原遺跡	久喜市	平安	46	入耕地遺跡	白岡町	縄文（中）
23	九宮１遺跡	菖蒲町	縄文（中）	47	茶屋遺跡	白岡町	縄文（早・前・後）
24	九宮２遺跡	菖蒲町	旧石器、縄文（後）、古墳（前）				

Ⅲ　遺跡の概要

上早見新田西遺跡は、久喜市大字上早見字新田に所在し、ＪＲ宇都宮線・東武伊勢崎線久喜駅の北東約2.5㎞の地点に位置している。

遺跡の所在する久喜市は加須低地に属し、関東造盆地運動の影響を受けて、市域全体が沈降している。遺跡周辺は、元荒川沿いの沖積地縁辺部にあたり、現在では沖積土に覆われている。遺跡は標高９ｍ前後を測る台地裾部に存在している。造盆地運動の開始は弥生時代以降と考えられていることから、縄文時代の周辺地域はローム台地が延びていたと考えられ、遺跡はそうした台地の縁辺に立地していたと考えられる。

今回の調査区は、南東部がやや高く、北西部が低地部へと傾斜しており、北東方向から南側か、または南西側に張り出したローム台地の肩部に位置していたと考えられる。

調査区は水路を挟んで西側と東側に分けた。調査の結果、住居跡等は東側の標高の少し高い部分から検出され、西側調査区からは遺物が少量出土したが、遺構は検出されなかった。西側調査区は遺構確認面で湧水があったので、安全のため調査終了後すぐに埋め戻した。

検出された遺構は、縄文時代後期の住居跡５軒、土壙13基、近世の溝跡２条である。

検出された５軒の住居跡は、重複するものが多く、調査区の西半部からまとまって検出された。住居跡からは、量は少ないものの称名寺式土器が主体として出土しており、住居跡の時期は後期初頭と考えられる。住居跡は掘り込みがほとんど残っておらず、炉跡とピットのみが検出された。住居跡は入り口部が張り出す形態の、柄鏡形住居跡であったと考えられるが、入口部の施設が不明確な住居跡もあった。また、入口部の埋甕は検出されなかった。

検出された13基の土壙のうち、第１～８号土壙は調査区西側から検出され、第４～８号土壙は住居跡と重複しており、掘り込みも浅く遺物も土器の小破片が出土したのみである。住居跡と重複していない第１～３号土壙については掘り込みが深く、比較的多くの遺物が出土した。遺物の時期は住居跡と同様、後期初頭の称名寺式土器である。そのうち並列して検出された第１・２号土壙は、断面形態が下膨れ状となる袋状土壙と呼ばれるものであった。２基は規模や深さが同様となるもので、おもに食物の貯蔵庫と考えられる形状の土壙であることから、住居跡に隣接する位置に計画的に設置されたとも考えられる。第９～13号土壙は、調査区の東側からまとまって検出された。いずれも残存する掘り込みは浅いものであった。第10号土壙からは、後期前葉の堀之内２式土器が１点検出されている。ほかの土壙からは称名寺式土器が主体として検出されており、土壙の時期は住居跡と同様の称名寺式期と考えられる。

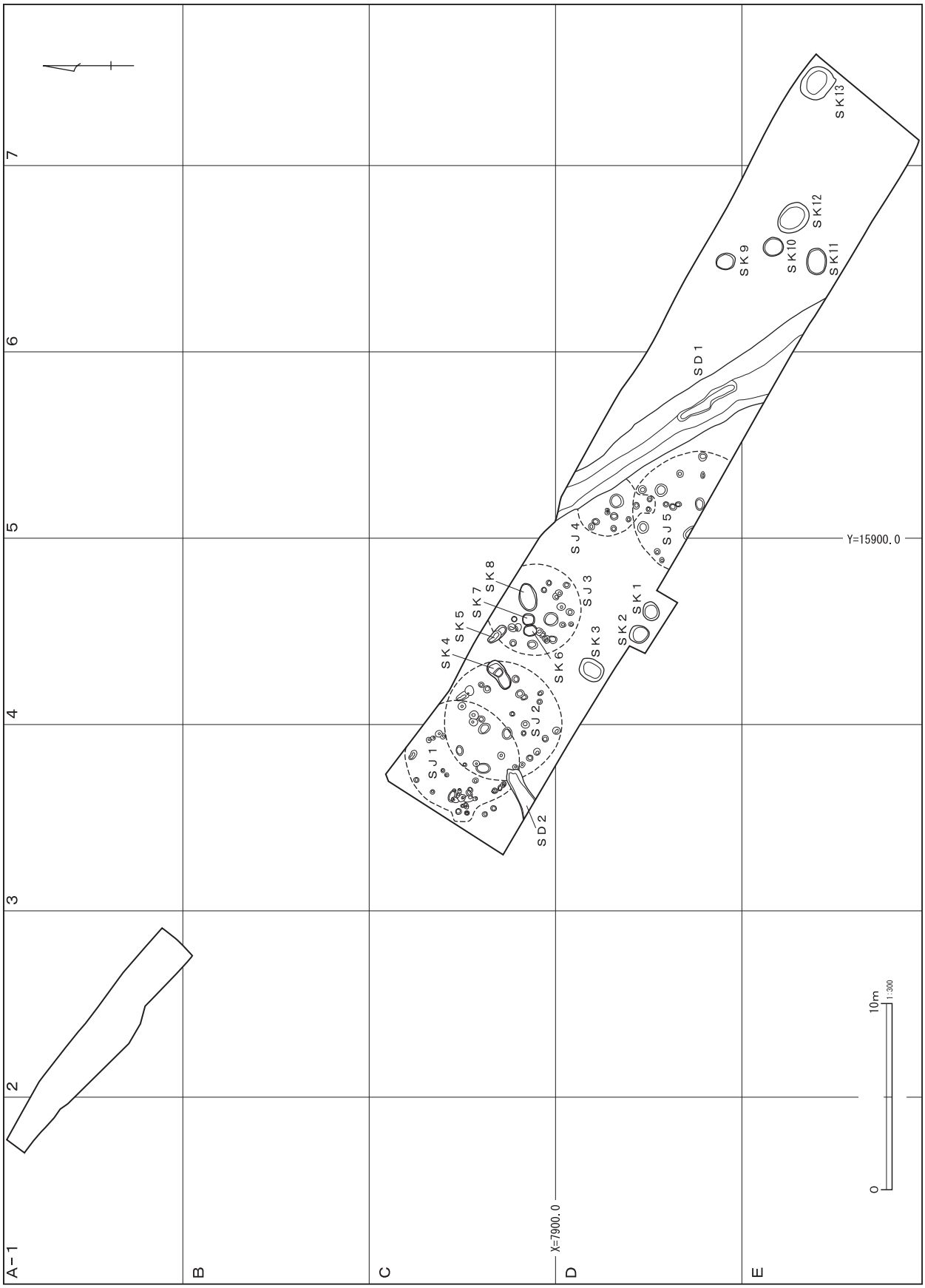
近世の溝跡のうち第１号溝跡は、最大幅が約2.5ｍとなるもので、調査区を南北方向に斜めに縦断している。遺物は、18世紀を中心とした陶磁器類、漆椀の蓋、板材、杭などが検出されている。第２号溝跡は、調査区の西端から一部が検出されたが遺物は出土しなかった。

調査区全体から検出された遺物は、縄文時代のものが大半を占めている。中心となる時期は、後期初頭の称名寺式期であるが、後期前葉の堀之内式土器も検出された。今回堀之内式期の住居跡は検出されなかったが、調査区域外に存在している可能性が考えられる。

今回、沖積土に覆われているため、遺跡の発見が困難である地域において、縄文時代後期初頭の集落を検出することができた。このことは、遺跡の発見の少ない地域において大きな成果であり、貴重なデータを追加することができた。

下溝久自治会館
諏訪神社
上早見
諏訪橋
千勝神社
上早見集会所
県道八万部・八喜停車場線
遺跡の範囲
発掘調査箇所
新田
新田
0
100m
1:2500

第３図　遺跡位置図


A−1
B
C
D
E
2
3
4
5
6
7
X=7900.0
Y=15900.0
SJ1
SJ2
SJ3
SJ4
SJ5
SK1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK7
SK8
SK9
SK10
SK11
SK12
SK13
SD1
SD2
0
10m
1:300

第 4 図　遺跡全体図

Ⅳ　遺構と遺物

１．縄文時代

（１）住居跡

第１号住居跡（第５・６図）

Ｃ－３・４グリッドに位置する。北東側の一部が調査区域外となっている。南東側では第２号住居跡と重複している。また、南西側は第２号溝跡と部分的に重複している。掘り込みは検出されず、炉跡とピットのみが検出された。重複する第２号住居跡も掘り込がみないため、新旧関係は不明である。また、２軒の範囲内からはピットが57本検出された。配列からピットを第１号住居跡と第２号住居跡にそれぞれ分類し、Ｐ１～Ｐ36までを第１号住居跡に伴うピットとした。

ピットの配列から、平面形は柄鏡形と考えられる。そのうちＰ19～31は、張り出し部となる入口部のピットと考えられる。また、Ｐ17・18は、住居跡の推定線外に位置するが、他にピットは検出されておらず、第１号住居跡に関連すると考えられることから、第１号住居跡のピットとして取り扱うこととした。張り出し部と炉跡を基準とした主軸方向はＮ－85°－Ｅをとる。推定される住居の規模は、主体部が長径6.04ｍ、短径5.85ｍ、残存する張り出し部が長さ0.75ｍ、幅1.20ｍである。

炉跡は主体部の中央やや東から検出された。地床炉である。平面形は楕円形で、規模は長径0.53ｍ、短径0.36ｍ、深さ0.10ｍである。

遺物は、重複する第２号住居跡出土遺物と明確に区分することができなかったため、第１・２号住居跡出土遺物として一括して図示することとした（第６図）。出土した遺物量は少量であった。

第６図１～22は出土した土器である。いずれも深鉢形土器の破片である。

１は波状口縁部の破片で、口縁には２列に列点文が施文されている。関沢類型と考えられる。

２は口縁部の破片で、地文は残存しないが、３～６の土器の口縁部に相当すると考えられる。

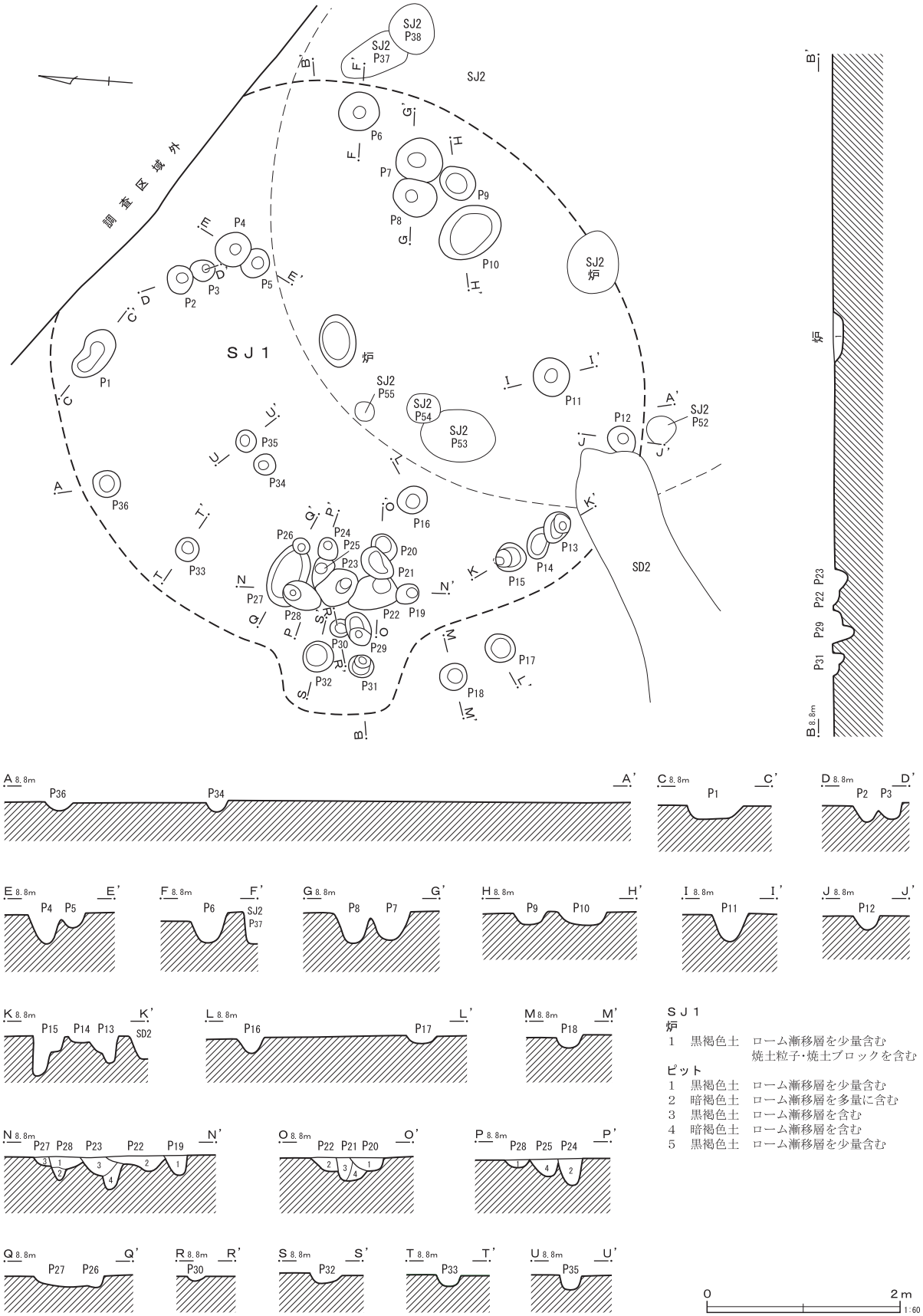
３～６は沈線による文様内に縄文を充填する土器で、胴部の破片である。小破片のため、全体の文様構成は不明である。単節ＬＲの縄文を、充填している。７～12は沈線による文様内に、列点を施す土器である。いずれも胴部の破片である。８はＪ字文を施している。13～17は沈線による区画内が、無文のものである。14は口縁部で、他が胴部の破片である。13は渦巻状の文様を施している。

18は地文縄文で、沈線文によって文様を施文する土器である。頸部で括れる器形のものである。地文は単節ＬＲの縄文を施文している。

19～21は沈線による文様が施文されない土器で

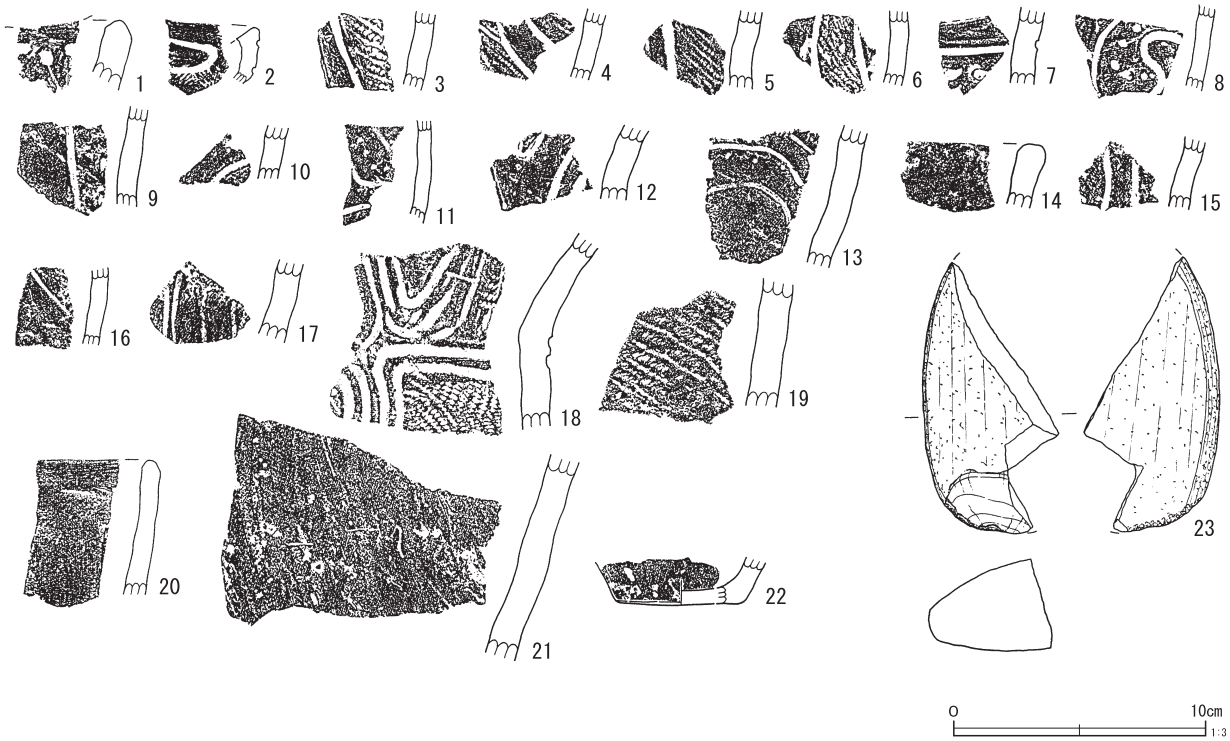
第２表　第１号住居跡ピット一覧表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
Ｐ1	0.57	0.29	0.13	Ｐ13	0.35	0.25	0.28	Ｐ25	0.34	0.21	0.18
Ｐ2	0.28	0.27	0.17	Ｐ14	0.33	0.21	0.06	Ｐ26	0.18	0.16	0.12
Ｐ3	0.25	0.22	0.16	Ｐ15	0.32	0.30	0.41	Ｐ27	0.58	0.39	0.14
Ｐ4	0.38	0.33	0.30	Ｐ16	0.32	0.28	0.15	Ｐ28	0.18	0.16	0.15
Ｐ5	0.32	0.23	0.15	Ｐ17	0.31	0.29	0.07	Ｐ29	0.36	0.25	0.22
Ｐ6	0.41	0.38	0.28	Ｐ18	0.29	0.27	0.12	Ｐ30	0.20	0.17	0.05
Ｐ7	0.47	0.45	0.29	Ｐ19	0.26	0.21	0.20	Ｐ31	0.26	0.22	0.12
Ｐ8	0.45	0.36	0.31	Ｐ20	0.29	0.16	0.14	Ｐ32	0.32	0.29	0.10
Ｐ9	0.38	0.31	0.12	Ｐ21	0.38	0.27	0.24	Ｐ33	0.25	0.23	0.11
Ｐ10	0.68	0.51	0.14	Ｐ22	0.53	0.34	0.16	Ｐ34	0.21	0.20	0.11
Ｐ11	0.41	0.37	0.28	Ｐ23	0.43	0.32	0.50	Ｐ35	0.23	0.20	0.15
Ｐ12	0.31	0.27	0.14	Ｐ24	0.24	0.21	0.27	Ｐ36	0.29	0.25	0.09



SJ1
炉
1　黒褐色土　ローム漸移層を少量含む
　　焼土粒子・焼土ブロックを含む
ピット
1　黒褐色土　ローム漸移層を少量含む
2　暗褐色土　ローム漸移層を多量に含む
3　黒褐色土　ローム漸移層を含む
4　暗褐色土　ローム漸移層を含む
5　黒褐色土　ローム漸移層を少量含む

第5図　第1号住居跡



第６図　第１・２号住居跡出土遺物

ある。19は縄文のみを施文する胴部片で、20・21は無文の胴部片である。19は太細の条を撚り合わせた、無節Ｒの縄文を地文としている。

22は底部の破片で、推定底径は５㎝である。

１～17、19～22は後期初頭の称名寺式土器で、そのほとんどが称名寺Ⅱ式土器と考えられる。18は後期前葉の堀之内１式土器である。

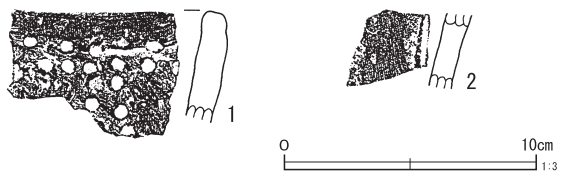
23は出土した磨石である。右半部を欠損する。表裏面は滑らかに磨られている。側面も磨面として使用され、面取りが認められる。下端部には敲打の痕跡と、それによる剥離が認められる。敲石としても使用されたと考えられる。残存する長さ10.8㎝、幅5.35㎝、厚さ3.7㎝、重さ179.2ｇである。石材は結晶片岩である。

遺物の主体となる時期は、後期初頭の称名寺Ⅱ式期と考えられる。

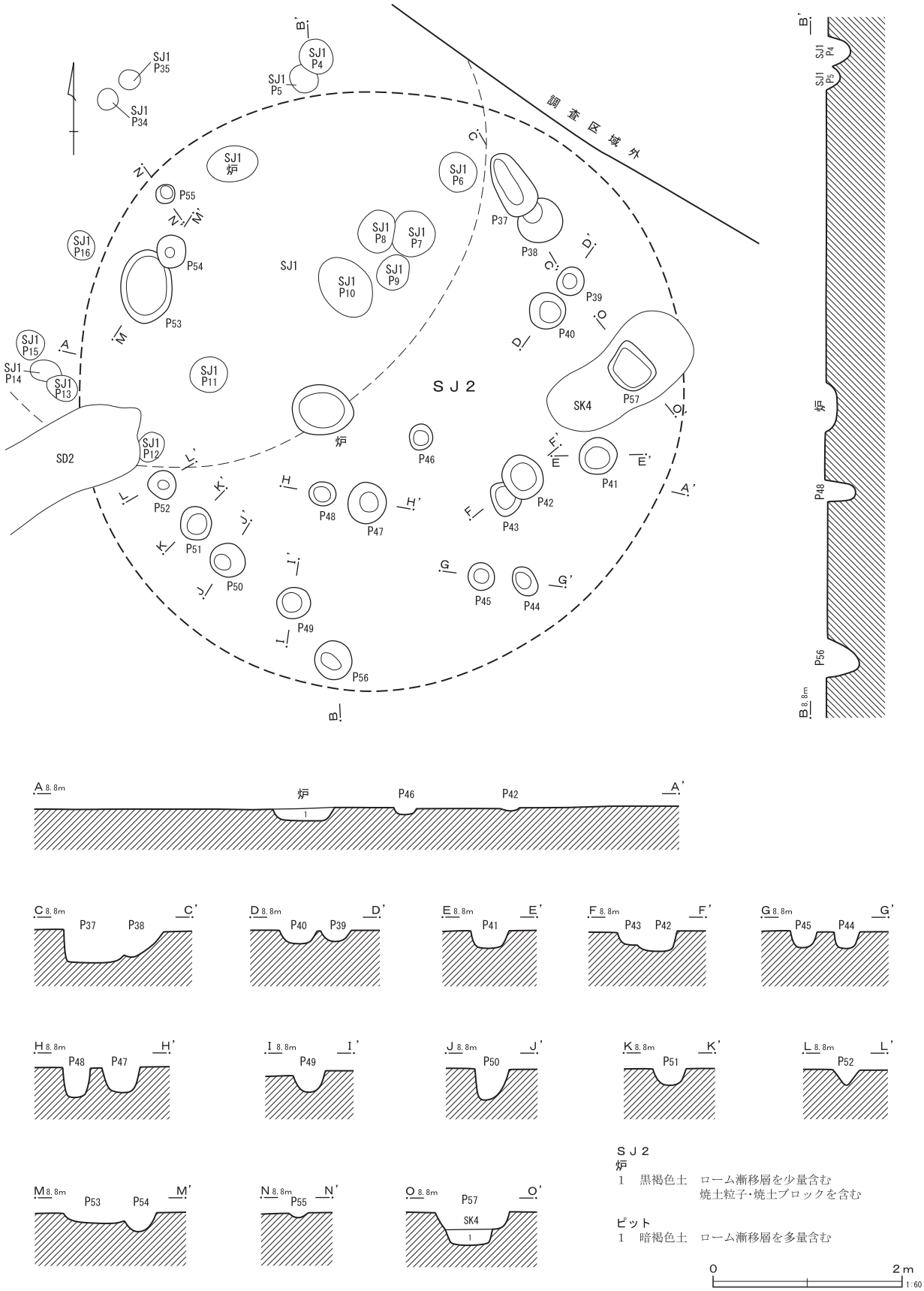
第２号住居跡（第６・７・８図）

Ｃ－３・４、Ｄ－５グリッドに位置する。北東側の一部が調査区域外となっている。北西側では第１号住居跡と重複している。東側には第４号土壙が重複している。また、西側は第２号溝跡と部分的に重複している。掘り込みは検出されず、炉跡とピットのみが検出された。重複する第１号住居跡も掘り込みがないため、新旧関係は不明である。また、２軒の範囲内からはピットが57本検出された。配列からピットを第１号住居跡と第２号住居跡にそれぞれ分類し、Ｐ37～Ｐ57までを第２号住居跡に伴うピットとした。

ピットの配列から、主体部の平面形は円形と考えられる。出土した遺物の時期から、柄鏡形であったと考えられるが、埋甕や対ピットなどの入口部分の施設は検出することができなかった。第１号住居跡と張り出し部の方向が同様であるとすれば、張り出し部分は第２号溝跡によって損なわれ



第７図　第２号住居跡出土遺物



SJ2
炉
1　黒褐色土　ローム漸移層を少量含む
　　焼土粒子・焼土ブロックを含む

ピット
1　暗褐色土　ローム漸移層を多量含む

第8図　第2号住居跡

第３表　第２号住居跡ピット一覧表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P37	0.63	0.37	0.54	P44	0.32	0.24	0.16	P51	0.34	0.32	0.17
P38	0.51	0.46	0.28	P45	0.29	0.27	0.16	P52	0.30	0.29	0.17
P39	0.29	0.27	0.11	P46	0.28	0.24	0.06	P53	0.76	0.50	0.11
P40	0.40	0.37	0.13	P47	0.44	0.39	0.25	P54	0.34	0.31	0.20
P41	0.41	0.37	0.17	P48	0.28	0.25	0.31	P55	0.22	0.21	0.05
P42	0.43	0.41	0.20	P49	0.35	0.33	0.20	P56	0.42	0.38	0.35
P43	0.34	0.22	0.13	P50	0.37	0.36	0.33	P57	0.45	0.40	0.46

た可能性が高いと考えられる。ピットの配列から推定される住居の規模は、長径6.36ｍ、短径6.30ｍである。

炉跡は、住居跡推定範囲の中央やや西よりから検出された。地床炉である。平面形は楕円形で、規模は長径0.64ｍ、短径0.53ｍ、深さ0.14ｍである。

検出された遺物のほとんどが、重複する第１号住居跡出土遺物と明確に区分することができなかったため、第１・２号住居跡出土遺物として一括して図示した（第６図）。第２号住居跡出土遺物として明確である遺物は、炉跡から検出されたごく少量の土器片のみである（第７図）。

第７図１・２は炉跡から出土した土器片で、いずれも深鉢形土器である。１は口縁部の破片で、口縁部には２列の円形列点文を巡らし、口縁部の列点から胴部に、２列の列点文を垂下させている。２は胴部の破片で、沈線で文様を施文するものである。文様内に縄文などを充填していたかは不明である。残存する無文部分は丁寧な調整が施されている。いずれも後期初頭の称名寺Ⅱ式土器と考えられる。

第３号住居跡（第９・10図）

Ｃ－４、Ｄ－４グリッドに位置する。北東側の一部が調査区域外となっている。住居跡の北半分には、第５・６・７・８号土壙が重複している。掘り込みは検出されず、炉跡とピットのみが検出された。

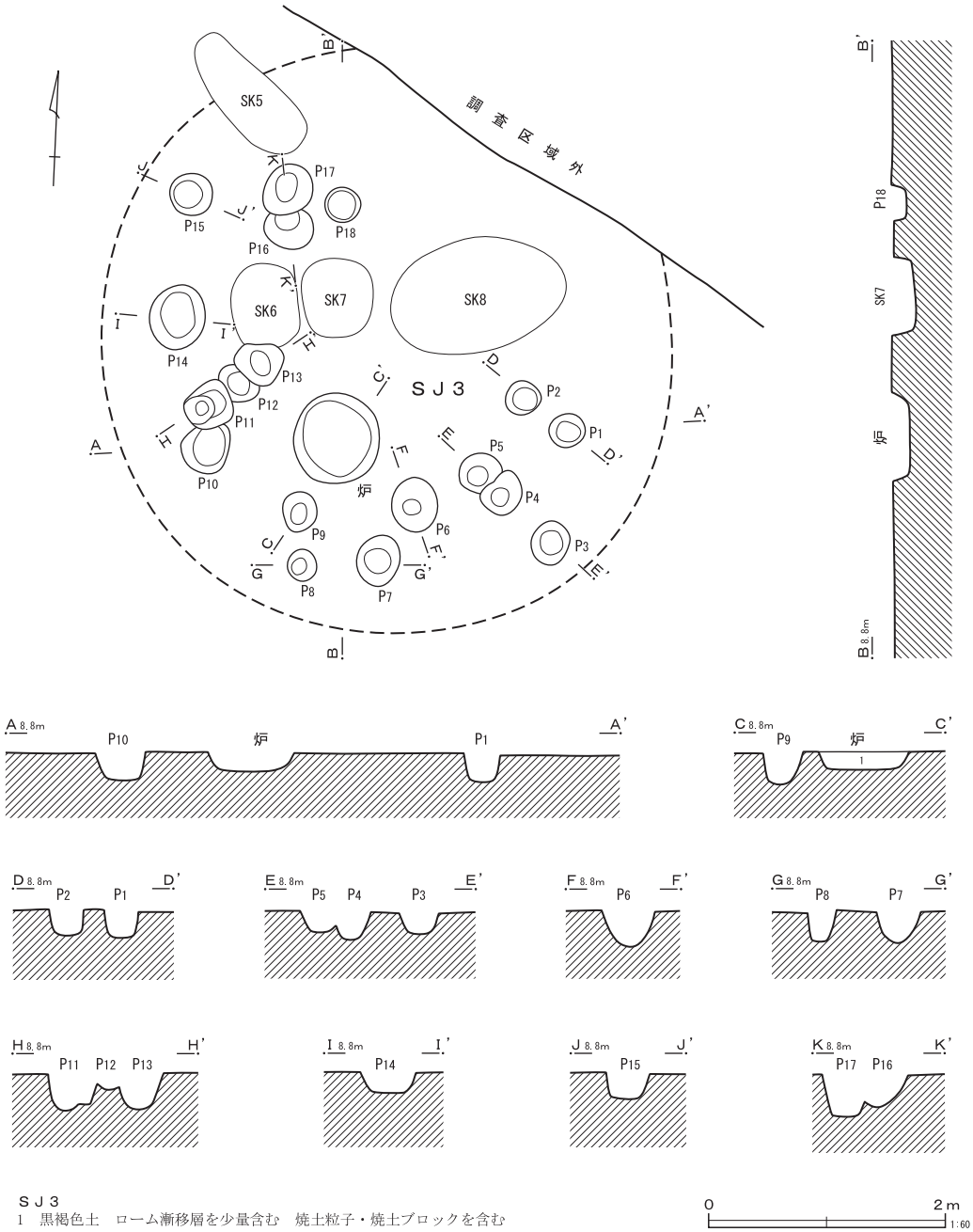
住居跡の形状は、18本検出されたピットの配列から平面形は円形と考えられる。出土した遺物の時期から、柄鏡形であったと考えられるが、埋甕や対ピットなどの入口部分の施設は検出することができなかったため、張り出し部は不明である。ピットの配列から推定される住居跡の規模は、長径4.98ｍ、短径4.83ｍである。

炉跡は、住居跡推定範囲の中央やや南よりから検出された。地床炉である。平面形は円形に近いもので、長径0.76ｍ、短径0.64ｍ、深さ0.15ｍである。

遺物はピット内を中心に検出されたが、掘り込みが残存していなかったため、出土した遺物量は少なかった。

第10図１～27は、検出された土器の破片である。いずれも深鉢形土器である。

１～15は後期初頭の称名寺式土器である。１～５は、沈線による文様内に縄文を充填する土器である。いずれも胴部の破片である。平行する沈線によって、Ｊ地文などの文様を施文するものである。充填されている縄文は、いずれも単節ＬＲである。６は文様内に条線を施文するものである。胴部の括れ部分の破片で、条線は櫛歯状で、文様の形状に沿って向きを変えて施文している。７～10は、文様内に列点を施文するものである。７は口縁部の破片である。口縁は内湾せず緩やかに外側に開く器形をしている。８～10は胴部の破片である。８は複数列の列点が施されている。11～16は沈線文のみが施文され、文様内は無文となるものである。いずれも胴部の破片である。沈線は細くなっており、浅く施文されるものが多い。器面は丁寧に調整されており、12は調整の痕が擦痕状



第９図　第３号住居跡

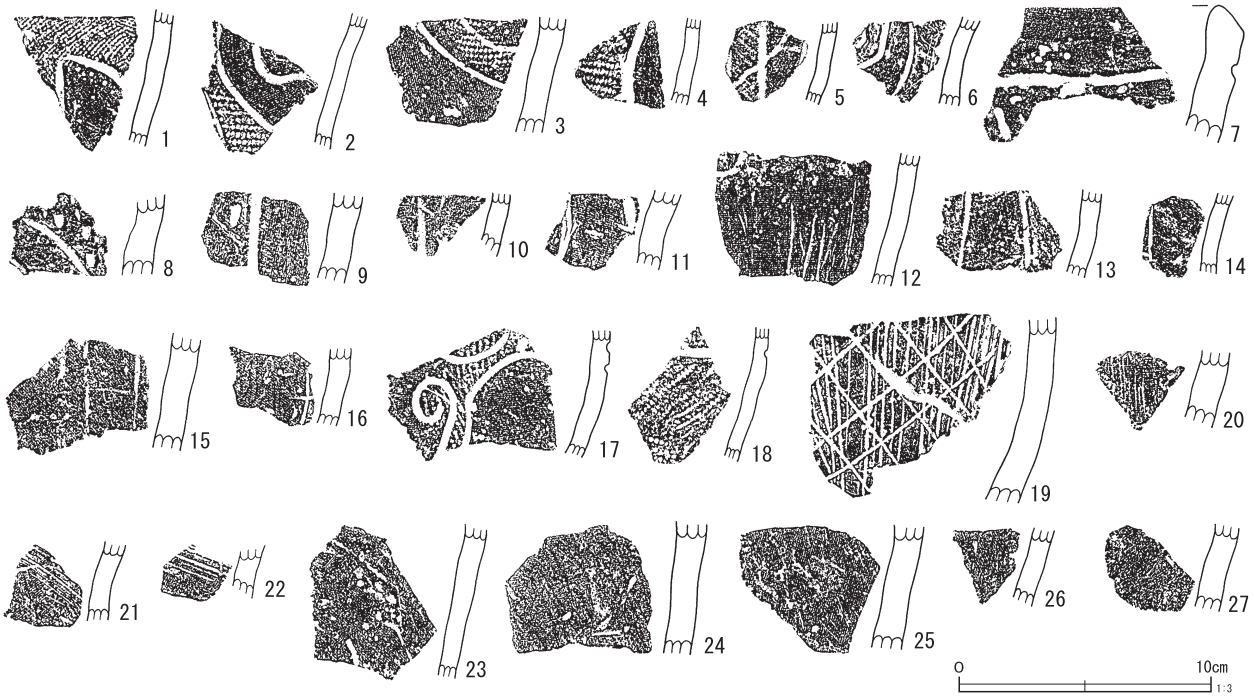
に残っている。

17・18は、後期前葉の堀之内１式土器である。17は文様が１本沈線文よって施文されるもので、蕨手文などが施文されている。地文は単節ＬＲの縄文を施している。18は口縁直下の破片で、器面には口縁部と胴部を区画する沈線を巡らす。胴部には地文である単節ＬＲの縄文を施文している。

19～22は条線のみを施文する土器である。19は縦方向の条線施文後に、格子目状に条線を施文する。20～22は櫛歯状の条線を施文している。

23～27は無文の土器である。器面はいずれも丁寧に調整が行われており、１～16の土器の底部に近い胴部部分の破片と考えられる。

遺物の主体となる時期は、後期初頭の称名寺Ⅱ式土器である。



第10図　第３号住居跡出土遺物

第４表　第３号住居跡ピット一覧表

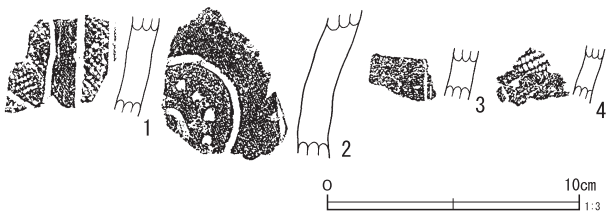
番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P１	0.30	0.28	0.24	P７	0.42	0.30	0.26	P13	0.41	0.35	0.30
P２	0.30	0.29	0.20	P８	0.26	0.22	0.24	P14	0.55	0.45	0.34
P３	0.38	0.32	0.17	P９	0.34	0.29	0.26	P15	0.37	0.36	0.20
P４	0.37	0.30	0.23	P10	0.46	0.37	0.22	P16	0.42	0.36	0.26
P５	0.35	0.29	0.17	P11	0.45	0.41	0.32	P17	0.47	0.40	0.35
P６	0.46	0.37	0.30	P12	0.37	0.21	0.13	P18	0.30	0.28	0.12

第４号住居跡（第11・12図）

Ｄ－５グリッドに位置する。南側の一部が第５号住居跡と重複している。また、北東側は重複する第１号溝跡によって、大きく破損されている。掘り込みは検出されず、炉跡とピットのみが検出された。

10本検出されたピットの配列から、平面形は柄鏡形と考えられる。そのうちＰ１・２は、張り出し部となる入口部の対ピットと考えられる。住居跡の形状と炉跡を基準とした主軸方向はＮ－25°－Ｅをとる。推定される住居の規模は、残存する主体部が長径3.45ｍ、短径3.36ｍ、残存する張り出し部が長さ0.84ｍ、幅0.99ｍである。

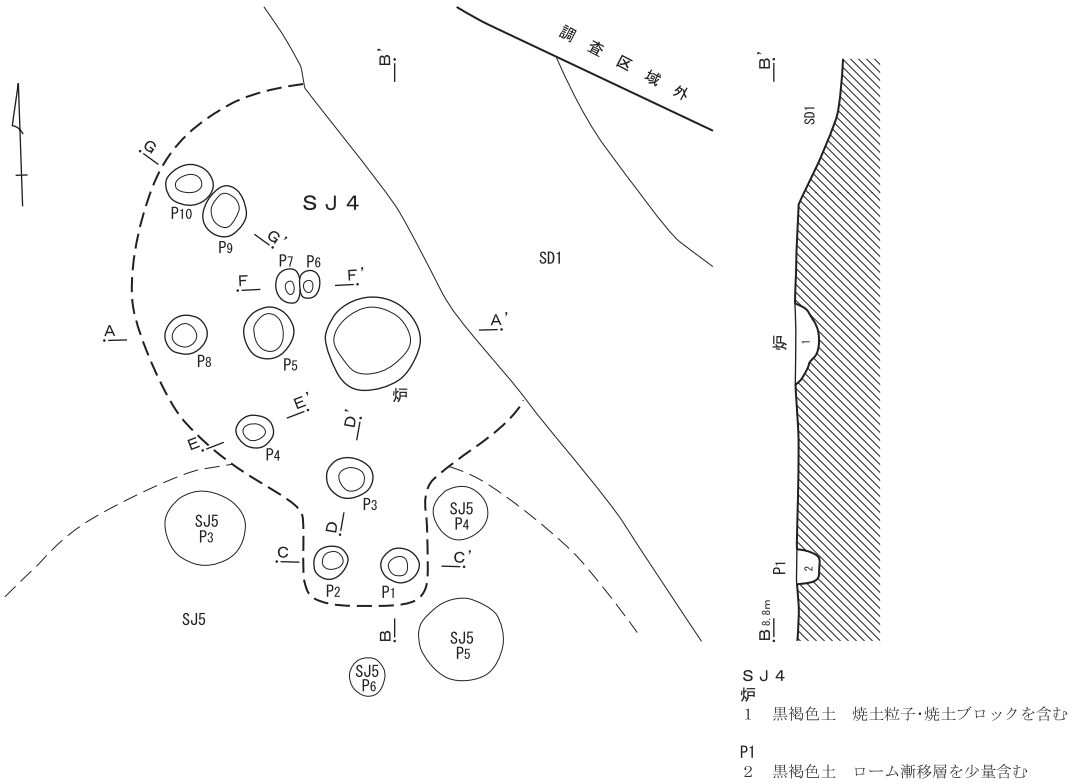
炉跡は主体部の中央やや南から検出された。地

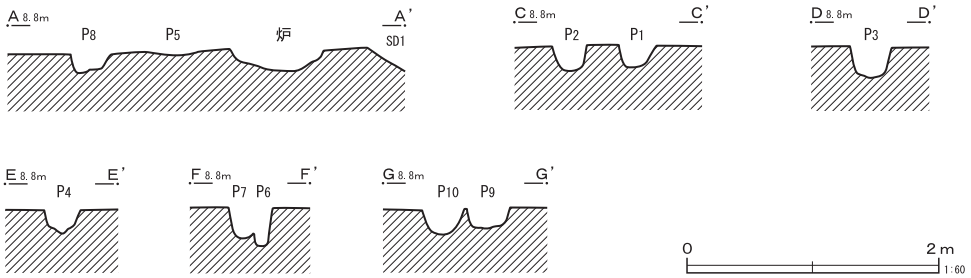


第11図　第４号住居跡出土遺物

第５表　第４号住居跡ピット一覧表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P１	0.30	0.26	0.18	P５	0.41	0.38	0.03	P９	0.40	0.33	0.16
P２	0.27	0.24	0.21	P６	0.24	0.15	0.30	P10	0.36	0.31	0.20
P３	0.35	0.30	0.26	P７	0.28	0.18	0.24	—	—	—	—
P４	0.28	0.25	0.19	P８	0.32	0.30	0.15	—	—	—	—





第12図　第４号住居跡

床炉である。平面形は楕円形で、規模は長径0.75ｍ、短径0.72ｍ、深さ0.15ｍである。

遺物はピット内を中心に検出され、出土量はごく少量であった。

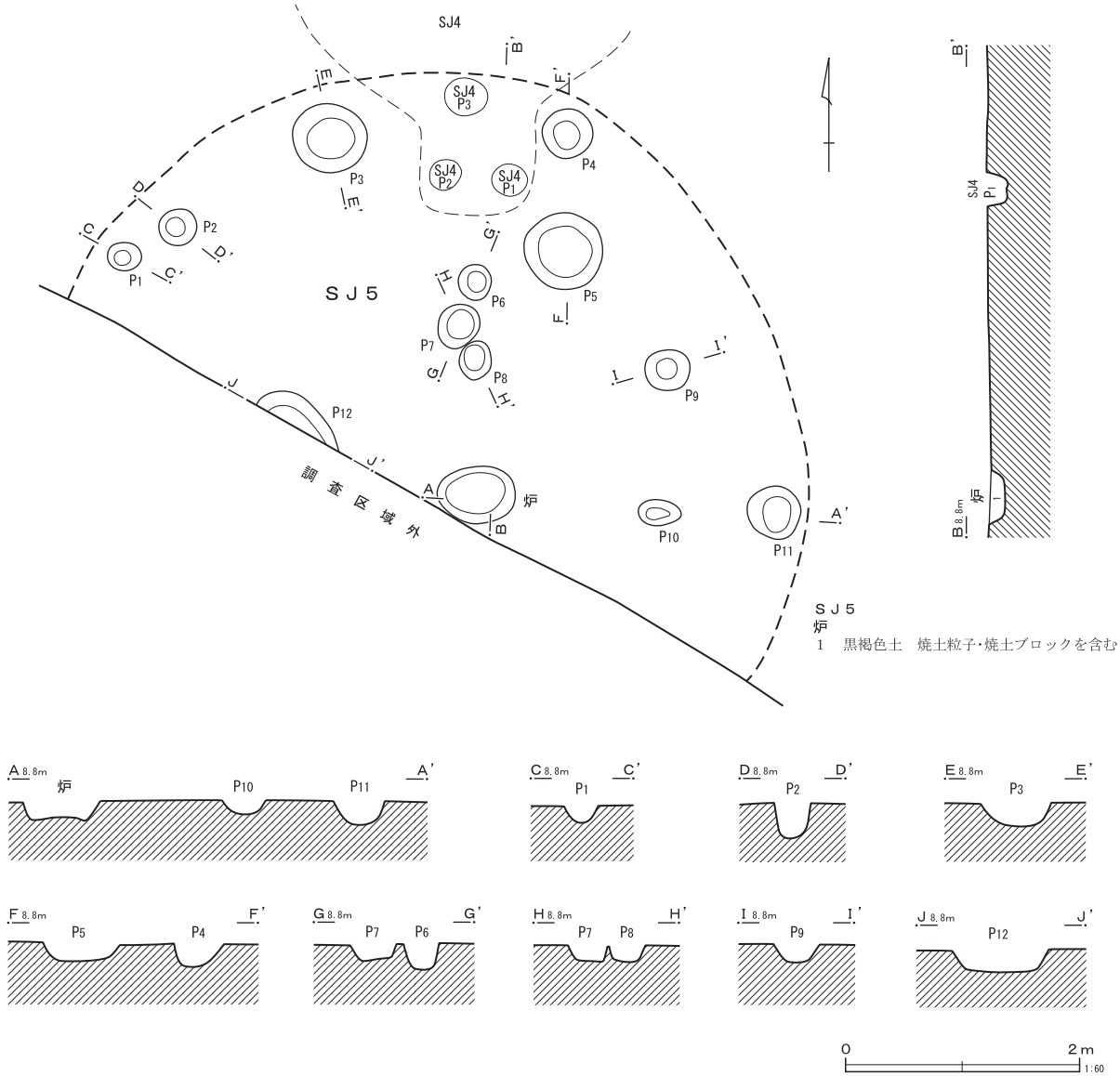
第11図１～４は検出された土器である。いずれも深鉢形土器の胴部の破片である。１は、沈線による文様内に、単節ＬＲの縄文を充填するものである。２は沈線による文様内に列点を施文するもので、刺突状の１列の列点文が、文様の形状に沿って施文されている。３・４は、沈線文が施されない土器片で、３は条線のみが施文されている。４は地文である単節ＬＲの縄文のみが施文される土器である。

遺物の時期は、後期初頭の称名寺式期である。

第５号住居跡（第13・14図）

Ｄ－４・５グリッドに位置する。北側の一部が第４号住居跡と重複している。また、南半部が調査区域外となっているため、検出することができなかった。掘り込みは検出されず、炉跡とピットのみが検出された。

12本検出されたピットの配列から、主体部の平面形は円形と考えられる。出土遺物の時期から、柄鏡形であったと考えられるが、張り出し部分は

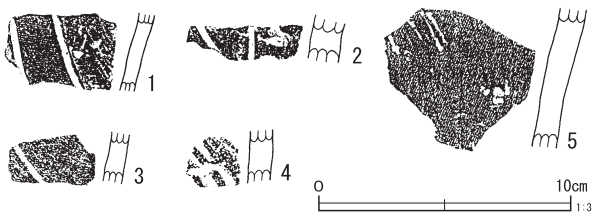


第13図　第５号住居跡

調査区域外となっており、その位置は不明である。住居の規模は、推定範囲の残存部分で、長径6.63ｍである。

炉跡は、主体部のほぼ中央と考えられる部分から検出された。地床炉である。平面形は楕円形で、規模は長径0.65ｍ、短径0.46ｍ、深さ0.17ｍである。

遺物は炉跡やピット内から、ごく少量検出されたのみであった。



第14図　第５号住居跡出土遺物

第14図１～５は検出された土器である。いずれも深鉢形土器の胴部の破片である。１～３は、平行する沈線によって文様を施文する土器である。１は沈線内に単節ＬＲの縄文を充填するものである。２・３の文様内は無文である。４は沈線文を施文するもので、堀之内１式土器と考えられる。５は無文の土器片である。丁寧に調整が施されており、１～３などの土器の、底部に近い胴部部分

の破片と考えられる。

遺物の主体となる時期は後期初頭の称名寺Ⅱ式土器である。

第６表　第５号住居跡ピット一覧表

番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P１	0.28	0.24	0.14	P５	0.67	0.64	0.16	P９	0.39	0.36	0.16
P２	0.32	0.28	0.30	P６	0.31	0.27	0.22	P10	0.36	0.22	0.13
P３	0.63	0.57	0.40	P７	0.39	0.33	0.14	P11	0.46	0.43	0.21
P４	0.42	0.42	0.20	P８	0.34	0.27	0.14	P12	0.79	0.24	0.18

（２）土壙

第１号土壙（第15・16・17図）

Ｄ－４グリッドに位置する。西側に第２号土壙が近接して検出されている。平面形は不整円形である。土壙は、開口部から窄まって中段部を作り、そこから底面にかけて大きく広がる袋状土壙の形状を呈している。底面はほぼ平坦に作り出されている。開口部の長径1.00ｍ、短径0.84ｍ、中段の長径0.72ｍ、短径0.69ｍ、底面の長径0.99ｍ、短径0.96ｍである。開口部から底面までの深さ0.70ｍである。

第16図１～25、第17図26～32は出土した遺物である。

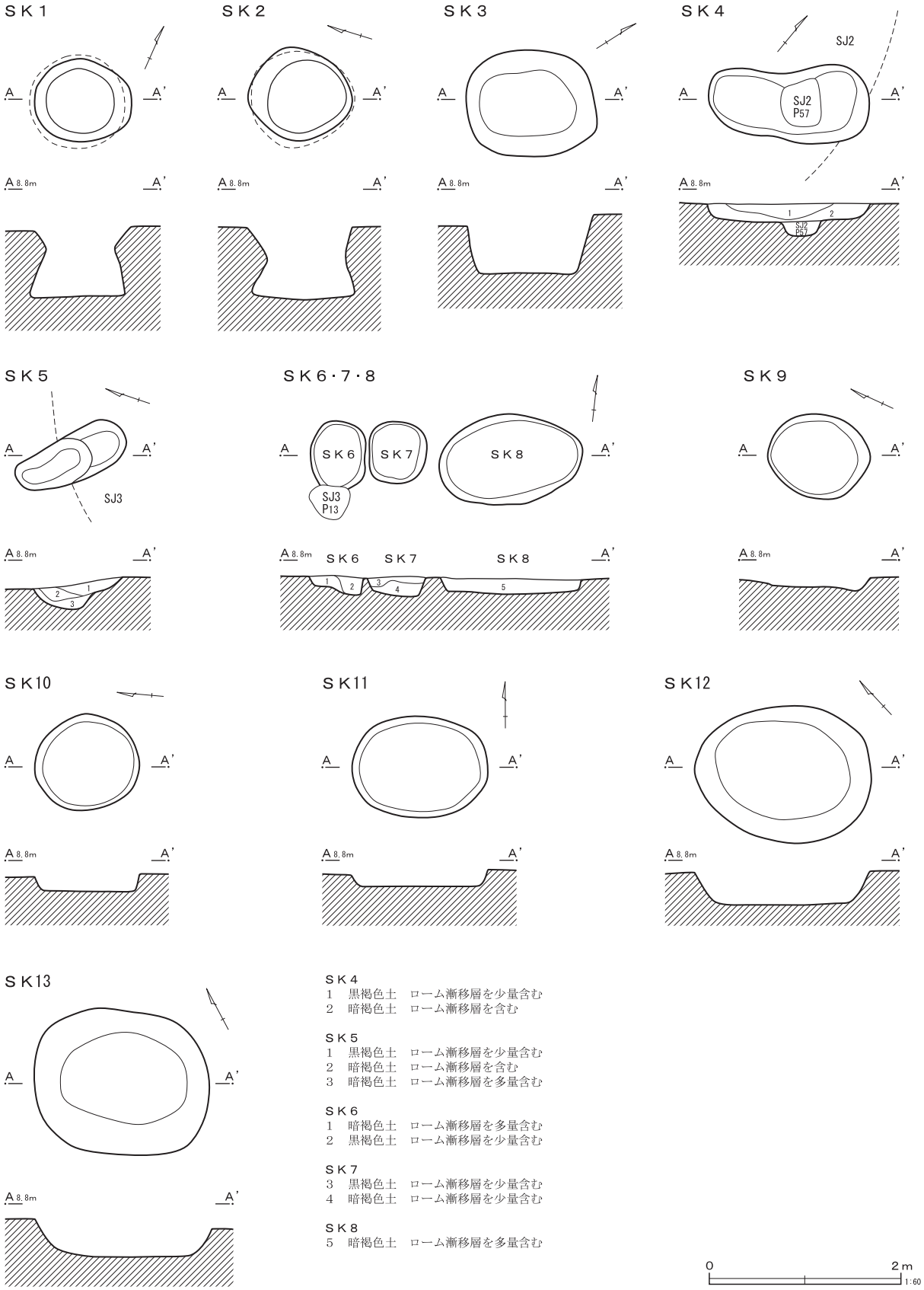
１～31は検出された土器である。いずれも深鉢形土器の破片と考えられる。

１～７は、平行する沈線によって描かれた文様内に縄文を充填する土器である。１・２・５は同一個体と考えられる破片である。１・２は口縁部の破片で、５は胴部の破片である。口縁部は波状口縁で、波頂部には把手が作り出されている。把手部分は、中央に円孔を貫通させている。把手外面は、面を持つ口唇部の左肩部から、盲孔を起点とした沈線が半円を描いた後、波頂部に向かい、波頂部からは円孔に沿って沈線を施文し、波頂部の盲孔を終点としている。把手内面は右肩部の盲孔を起点として、外面と同様の文様が施文されている。内面側には把手の根元に、対になる盲孔が施文されている。胴部には平行する沈線文によって文様が施文される。充填される縄文は単節ＬＲである。３・４は同一個体の口縁部の破片である。口縁は４単位の波状口縁と考えられ、波頂部にはＣ字状の貼付文を施している。Ｃ字文の内側は中央に盲孔を施文し、それを起点とした沈線文をＣ字文に沿って施文し、内屈する口唇肩部へと続く。Ｃ字文の右外側にも盲孔を施文し、それを起点として、口唇肩部に沈線文を施文している。胴部の文様内には単節ＬＲの縄文を充填している。６～８は胴部の破片で、６・７は無節Ｌ、８は単節ＬＲの縄文を文様内に充填している。

８・９は、平行する沈線文様内に列点を施文するものである。列点は複数列施文される。

11～24は、平行する沈線文様内が無文となるものである。11・13・14は同一個体と考えられる口縁部の破片である。口縁は把手の付く波状口縁部となるもので、把手部分は上下２段の円孔を貫通させている。把手の内面側では、上段の円孔の下の両側に１つずつ小円孔を貫通させ、それを起点としたＣ字状文が上の円孔を囲むように施文している。下段の円孔は左右両側に対向して、盲孔を起点するＣ字状文を施文している。内面右側のＣ字状文に伴う盲孔は、下側のみ施文されている。把手の外面にはやや捻りを加えた隆帯が、上の円孔を囲むように貼付しながら、橋状に口縁部に取り付けられている。胴部には平行する沈線によって、Ｊ字文などの文様が施文されているが、全体の文様構成は不明である。

12は波状口縁部の破片で、波頂部にはＣ字状の



ＳＫ４
1　黒褐色土　ローム漸移層を少量含む
2　暗褐色土　ローム漸移層を含む

ＳＫ５
1　黒褐色土　ローム漸移層を少量含む
2　暗褐色土　ローム漸移層を含む
3　暗褐色土　ローム漸移層を多量含む

ＳＫ６
1　暗褐色土　ローム漸移層を多量含む
2　黒褐色土　ローム漸移層を少量含む

ＳＫ７
3　黒褐色土　ローム漸移層を少量含む
4　暗褐色土　ローム漸移層を少量含む

ＳＫ８
5　暗褐色土　ローム漸移層を多量含む

第15図　土壙

貼付文が施されている。15～24は胴部の破片である。15・16には、Ｊ字文などが施文されている。

25～29は、沈線文による文様が施文されない胴部の破片である。25は器面に条線のみが施文されるもので、26～29は無文である。

30・31は底部の破片である。器面に文様は施文されていなかった。

32は検出された石器である。スクレイパーで、調整は表面側に認められ、裏面には１次剥離面が大きく残存している。長さ3.0㎝、幅2.0㎝、厚さ0.85㎝、重さ5.0ｇで、石材は黒曜石である。

遺物の時期は後期初頭で、称名寺Ⅱ式土器が主体を占めている。

第２号土壙（第15・18図）

Ｄ－４グリッドに位置する。東側に第１号土壙が近接して検出されている。平面形は不整円形である。土壙は、開口部から窄まって中段部を作り、そこから底面にかけて大きく広がる袋状土壙の形状を呈している。底面はほぼ平坦に作り出されている。開口部の長径1.08ｍ、短径0.96ｍ、中段の長径0.81ｍ、短径0.73ｍ、底面の長径1.08ｍ、短径0.96ｍである。開口部から底面までの深さ0.76ｍである。

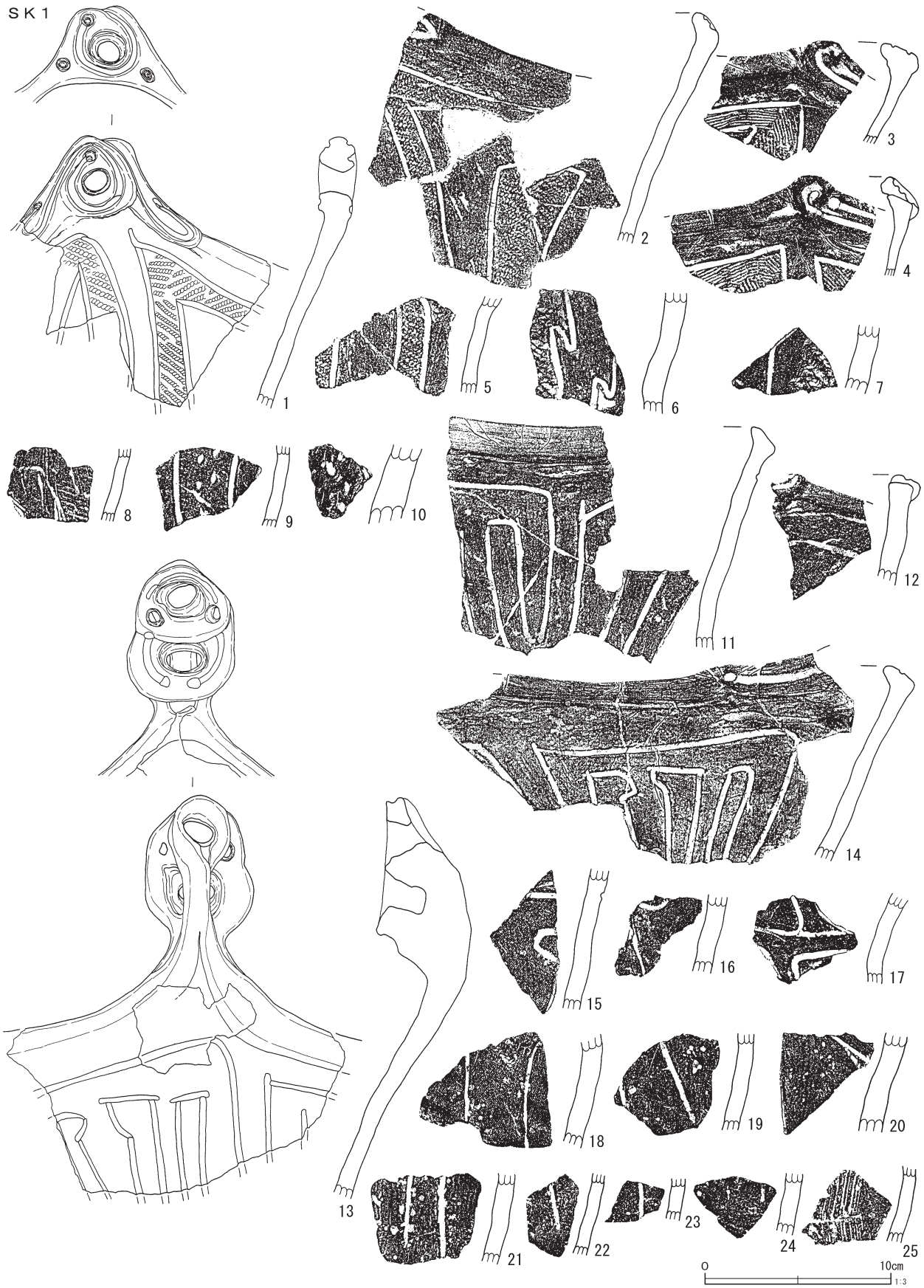
第18図１～６は出土した深鉢形土器である。１・２は胴下半から底部の破片である。１は平行する沈線によって文様が施文されると考えられる。文様の端部は閉じられている。沈線文のみで、他は無文である。底径は5.5㎝である。２は器面に複数の列点文を密に施文するものである。列点形状は、爪形状となっている。底径は6.6㎝である。３・４は平行する沈線文によってＪ字文などを施文するもので、文様内には列点文を施文している。５は沈線文のみ施文されるものである。６は無文の底部で、３と同一個体と考えられる。遺物の時期は後期初頭で、称名寺式土器である。

第３号土壙（第15・18図）

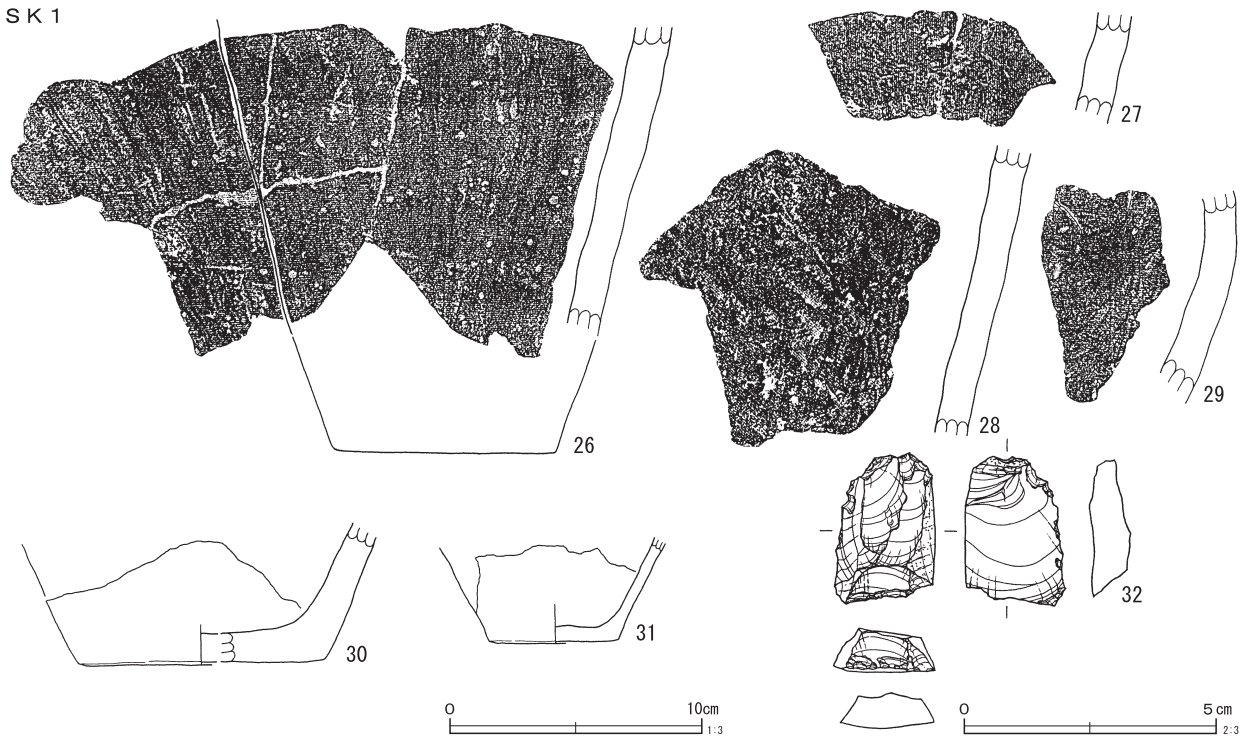
Ｄ－４グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は長径1.30ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.60ｍである。袋状土壙の形状は呈していないが、第１・２号土壙に近接している。住居跡と重複しないことや、掘り込みが比較的深いこと、遺物量が多いことなどから、第１・２号土壙と使用目的が同じ可能性が高い。

第18図７～19は検出された土器である。７は深鉢形土器の胴下半から底部の破片である。胴中央で括れ、やや膨らみを持って底部に至る器形である。器面には平行する沈線によって、胴上半にはＪ字文などが施文される。下半は懸垂文状となっており、下端は開放されている。文様内には単節ＬＲの縄文を、形状に沿って充填している。推定される底径は5.8㎝である。８は口縁部に把手を貼付する、小型の鉢形土器である。把手部分は、土器外面から内面に向かって板状となっており、内面にはＣ字状の貼付文を施している。Ｃ字状文上では、把手先端に円孔を貫通させ、孔を起点とした沈線文を施し、反対側の端部に盲孔を施文して終点としている。Ｃ字状文の下にも盲孔を施文している。外面の把手背面には先端の円孔を起点とする浅いなで状の沈線が施文されている。把手の側面には上下２個所の円孔を貫通させ、上下の円孔間には両側面ともに左右に１個所ずつ盲孔を施し、沈線によってその間を結んでいる。胴部には平行する沈線文によってＪ字文などを施文し、Ｊ字文の先端は釣り針状となっている。沈線文内には列点文が１列施文される。９は８と同一個体と考えられるが、接点がないため別図とした。沈線文は懸垂文状となり、端部は開放されている。底径は５㎝である。

10、13～18は、平行する沈線によって文様を施文する深鉢形土器の破片である。10、13～15は文様内に縄文を充填している。10の口縁にはゆるやかな波頂部が残存し、頂部にはＣ字状文が貼付され内側には１個所盲孔を施文し、それを起点として沈線文を施文している。文様内には単節ＲＬの



第16図　土壙出土遺物（１）



第17図　土壙出土遺物（２）

縄文を充填している。13～15は胴部の破片で、単節ＬＲの縄文を平行する沈線文様内に充填している。16は平行沈線文様内に列点を、17・18は平行沈線文様内が無文となるものである。

11・12は同一個体の、注口付きの浅鉢の破片である。11は注口部分の破片である。注口の上には把手が貼付される。外面からは、注口部から捻りを加えた板状の隆帯が橋状に把手部分に取り付けられている。把手の内面側には盲孔を起点とした沈線によるＣ字状文が施文されている。器面は丁寧に調整され、光沢を持っている。

19は単節ＬＲの縄文のみが施文される深鉢形土器の胴部の破片である。

遺物の時期は後期初頭で、称名寺Ⅱ式土器が主体を占めている。

第４号土壙（第15・18図）

Ｃ－４グリッドに位置する。第２号住居跡と重複している。平面形は楕円形で、規模は長径1.68ｍ、短径0.66ｍ、深さ0.31ｍである。土壙内には第２号住居跡のＰ57が重複しており、土層観察からすると第４号土壙が第２号住居跡より新しいと考えられる。

第18図20・21は検出された遺物である。深鉢形土器の胴部小破片である。20は沈線文が施文されている。20・21ともに器面は丁寧に調整がされている。遺物の時期は後期初頭で、称名寺式土器と考えられる。

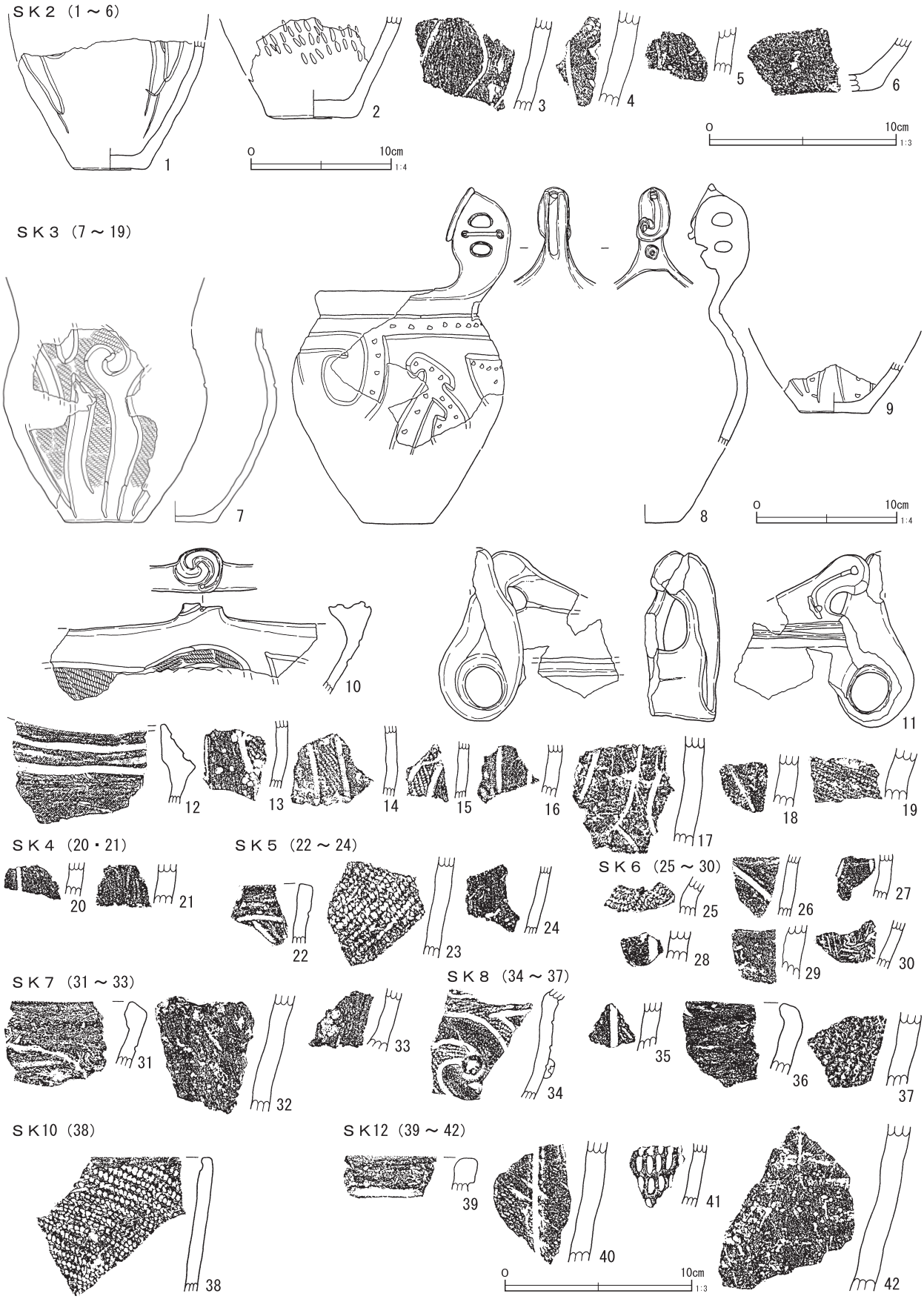
第５号土壙（第15・18図）

Ｃ－４グリッドに位置する。第３号住居跡と重複している。平面形は楕円形である。規模は長径1.20ｍ、短径0.46ｍ、深さ0.30ｍである。底面は段差を持ち、北西側が深く掘り込まれている。

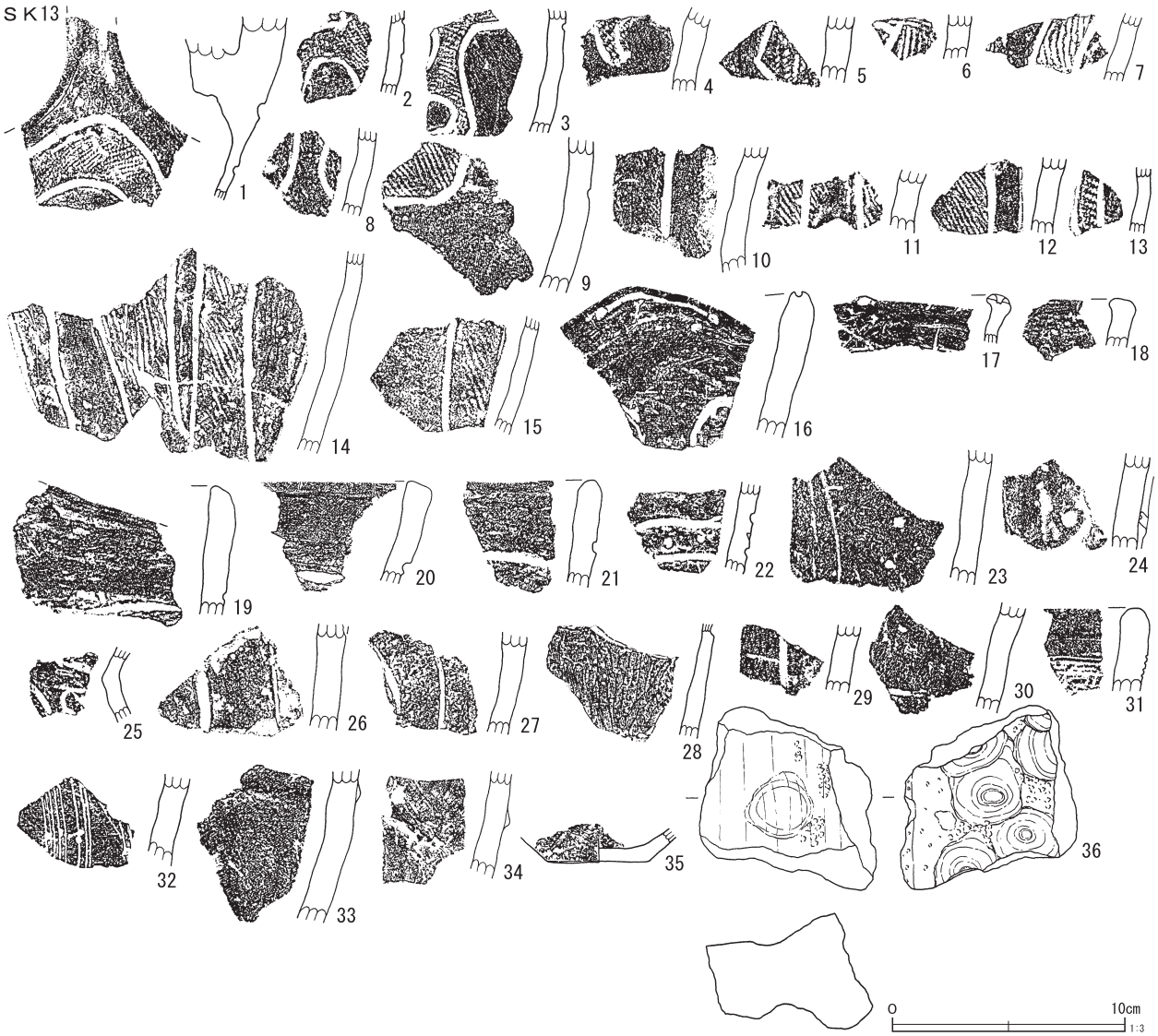
第18図22～24は検出された深鉢形土器の破片である。22は口縁部の破片で、無文の口縁部を持ち、胴部には沈線によって文様が施されたと考えられる。23・24は胴部の破片で、23は単節ＬＲの縄文のみが施文される。24は無文である。遺物の時期は後期初頭から前葉と考えられる。

第６号土壙（第15・18図）

Ｃ－４グリッドに位置する。第７・８号土壙と



第18図　土壙出土遺物（３）



第19図　土壙出土遺物（４）

東西方向に並んで検出された。第７号土壙とは東側でほぼ接している。第３号住居跡と重複している。平面形は不整円形で、規模は長径0.68ｍ、短径0.54ｍ、深さ0.18ｍである。

第18図25～30は、検出された深鉢形土器の破片である。いずれも小破片である。25～28は平行する沈線によって文様を施文するもので、胴部の破片である。25は文様内に単節ＬＲの縄文を充填している。26～28の沈線文様内は、無文である。29・30は沈線文が施文されない土器で、29は無文で、30は条線のみを施文している。遺物の時期は後期初頭で、称名寺式土器である。

第７号土壙（第15・18図）

Ｃ－４グリッドに位置する。第６・８号土壙と東西方向に並んで検出された。第６号土壙とは西側でほぼ接している。東側には第８号土壙が近接している。第３号住居跡と重複している。平面形は不整円形で、規模は長径0.66ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.20ｍである。

第18図31～33は検出された深鉢形土器の破片である。31は口唇部が内側に折れる口縁部の破片で、無文の口縁部には沈線が巡らされている。32は無文の胴部の破片である。遺物の時期は、後期初頭と考えられる。

第８号土壙（第15・18図）

Ｃ－４グリッドに位置する。第６・７号土壙と東西方向に並んで検出された。西側には第７号土壙が近接している。第３号住居跡と重複している。平面形は楕円形で、規模は長径1.68ｍ、短径0.66ｍ、深さ0.31ｍである。

第18図34～37は検出された深鉢形土器の破片である。34は平行する沈線文によって、Ｊ字文を施文しその先端部に円形貼付文を施している。貼付文上には、盲孔を施している。沈線文内には単節ＬＲの縄文を充填している。35は沈線文内に無節Ｌの縄文を充填している。36は口唇部が内屈する口縁部の破片で、器面は無文である。37は胴部の破片で、単節ＬＲの縄文のみを施文している。遺物の時期は後期初頭で、称名寺式土器である。

第９号土壙（第15図）

Ｄ－６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.06ｍ、短径0.80ｍ、深さ0.12ｍである。

第10号土壙（第15・18図）

Ｅ－６グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長径1.08ｍ、短径0.94ｍ、深さ0.18ｍである。

第18図38は、検出された深鉢形土器の口縁部片である。単節ＲＬの縄文のみが施文されるもので、口縁部内面には沈線が１本巡らされている。遺物の時期は後期前葉で、堀之内２式土器である。

第11号土壙（第15図）

Ｅ－６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.42ｍ、短径1.00ｍ、深さ0.16ｍである。

第12号土壙（第15・18図）

Ｅ－６グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.82ｍ、短径1.26ｍ、深さ0.34ｍである。

第18図39～42は検出された深鉢形土器の破片である。39は口縁部の破片で、狭い無文の口縁部は沈線によって区画されている。40は地文が単節ＬＲの縄文で、沈線文が深く施文されている。41は胴部の破片で、器面に複数列の列点文が、密に施されるものである。42は無文の土器である。遺物の時期は後期初頭から前葉と考えられる。

第13号土壙（第15・19図）

Ｅ－７グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長径1.81ｍ、短径1.46ｍ、深さ0.36ｍである。

第19図１～36は検出された遺物である。

１～35は検出された土器である。１～30は、平行する沈線文によって文様を施文する深鉢形土器の破片である。１～15は沈線文様内に、縄文を充填するもので、３は単節ＲＬ、他は単節ＬＲの縄文を施文している。１は口縁部の破片である。波状口縁となるもので、波頂部には把手が貼付されたと考えられるが、破損しているため形状は不明である。２～15は胴部の破片で、２～９の器面には、Ｊ字文などの文様が施文されると考えられる。10～15の平行する沈線文は懸垂文状となっている。16～30は沈線文様内が列点施文、または無文となる土器である。16～21は口縁部の破片である。16の波頂部の口唇部には、頂部を中心として左右に盲孔を施文し、盲孔間を沈線文で結んでいる。17のゆるやかな波頂部には、盲孔が施文される。22～30は胴部の破片で、22・23は列点文が施文される。24は器面に隆帯を垂下させ、隆帯上に盲孔を施す円形貼付文を施文している。31・32は条線のみが施文される土器である。33・34は胴部の破片で、器面には微隆起状の隆帯が施文されている。35は底部の破片で、推定底径は4.5㎝である。

36は検出された石器である。石皿の小破片である。裏面には多数の凹部が作り出されている。残存する長さ7.85㎝、幅7.55㎝、厚さ5.40㎝で、重さ233.9ｇである。石材は安山岩である。

遺物の主体となる時期は、後期初頭の称名寺Ⅱ式土器である。

（３）グリッド出土遺物

グリッド出土土器

調査区内からは、遺構の時期と同様に後期初頭から前葉の土器が検出され、その大部分が後期初頭の称名寺式期の土器群であった。

第Ⅰ群土器（第20～23図）

後期初頭の称名寺式系土器群を一括する。

第１類（第20図１～５）

波状口縁部を持ち、微隆起状の隆帯で文様を施文する関沢類型の土器群を一括する。

１～５は口縁部とその周辺の破片である。３は微隆起状の隆帯に沿って、２列の円形刺突文が施されている。単節ＬＲの縄文が施されている。

第２類（第20図６～61、第21図62～100）

平行する沈線文様内に、縄文を充填する土器群を一括する。

深鉢形土器で、口縁部は波状口縁を持つものと、平縁のものがある。口縁部は、内湾するものと緩く開くものがある。胴部は括れを持っており、46・47に見られるような緩やかに括れるものと、99のように強く括れるものがある。

６～20は口縁部の破片である。口縁部直下は無文となるもので、口縁部文様帯が施文されるものはなかった。６は波状口縁部の頂部が、円筒状の把手となるものである。７の波状口縁部の頂部には、円孔が穿たれている。孔の周囲を巡り内外面に、隆帯を円形に貼付している。充填される縄文は６が単節ＲＬ、12が無節Ｌで、他は単節ＬＲである。21～100は胴部の破片である。平行する沈線によって、Ｊ字文などの文様を施文するものであるが、文様が懸垂文化する破片が多く出土している。また、文様の下端が閉じる土器片は検出されていない。21は隆帯が貼付されるもので、隆帯上には刻みが施されている。充填される縄文は、37・50・66・83・87・91・92・99は単節ＲＬ、27・42・84は無節Ｌ、他は単節ＬＲを施している。

第３類（第21図101～104）

平行する沈線文様内に、充填縄文と列点文の両方を施文する土器群を一括する。

101～104はいずれも胴部の破片で、第１類と同様に、Ｊ字文などを施文すると考えられる。充填される縄文は、101が単節ＲＬ、102～104は単節ＬＲである。列点は縄文を施文後に施されている。

第４類（第21図105～111）

平行する沈線文様内に、条線を充填施文する土器群を一括する。

施文される平行沈線文様や、器形は第２類と同様である。105は波状口縁部の破片で、他は胴部の破片である。105・108は単位を区切って短く施文する条線が、充填施文されている。他は、櫛歯状の条線を充填施文している。

第５類（第21図112～119、第22図120～168）

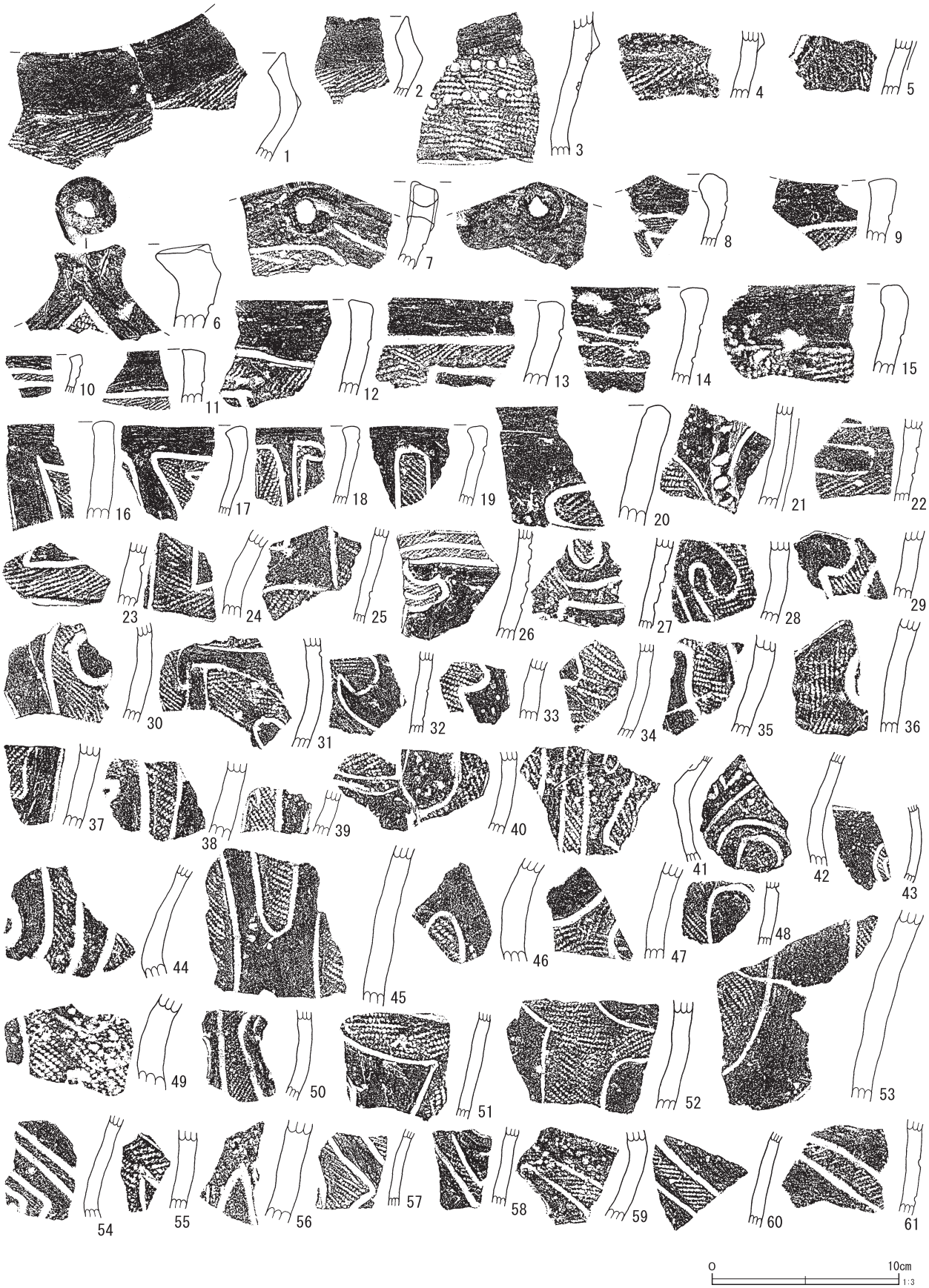
平行する沈線文様内に、列点文を施文する土器群を一括する。

器形や、施文される文様は第２類～第４類と同様である。115～117は波状口縁部の破片で、115・117の波頂部には内外面に円形刺突を施文している。外面波頂部の円形刺突文周囲には隆帯を円形に貼り付け、115の隆帯上には沈線をＣ字状に施文している。口縁部の肩部には波頂部を中心に沈線を施文し、沈線の起点には盲孔を施す隆帯を貼付している。116の波頂部には、渦巻き状の隆帯を貼付している。118～168は胴部の破片である。文様内に施文される列点は、列状に施文されるものと、充填するように複数が施文されものがある。列点は、押し引き状に施文するものと、円形や三角形状に刺突するものがある。

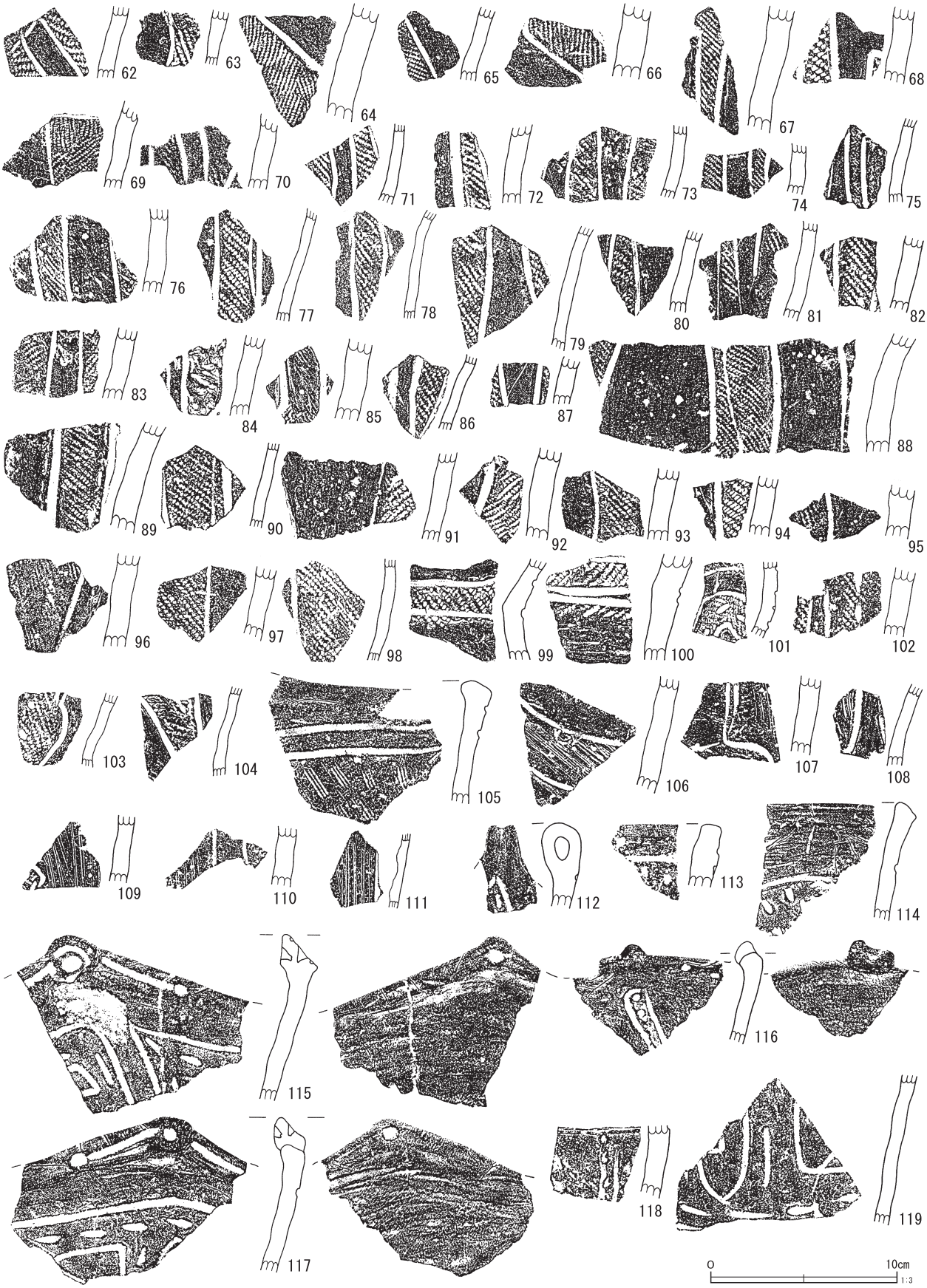
第６類（第22図169～183、第23図184～219、第25図301）

平行する沈線文様内が、無文となる土器群を一括する。

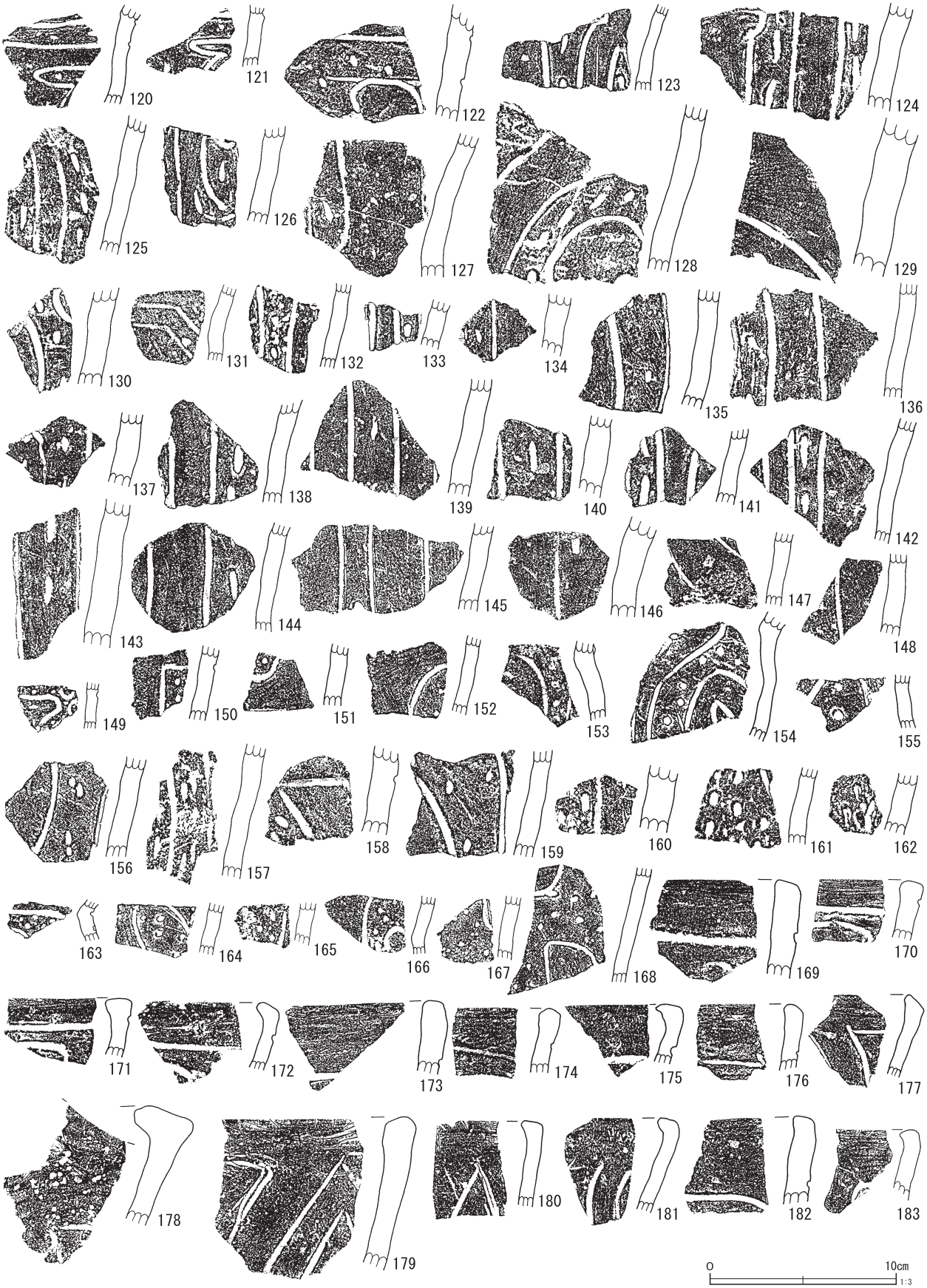
器形や、施文される文様は第２類～第４類と同様である。169～183は口縁部、184～219は胴部の



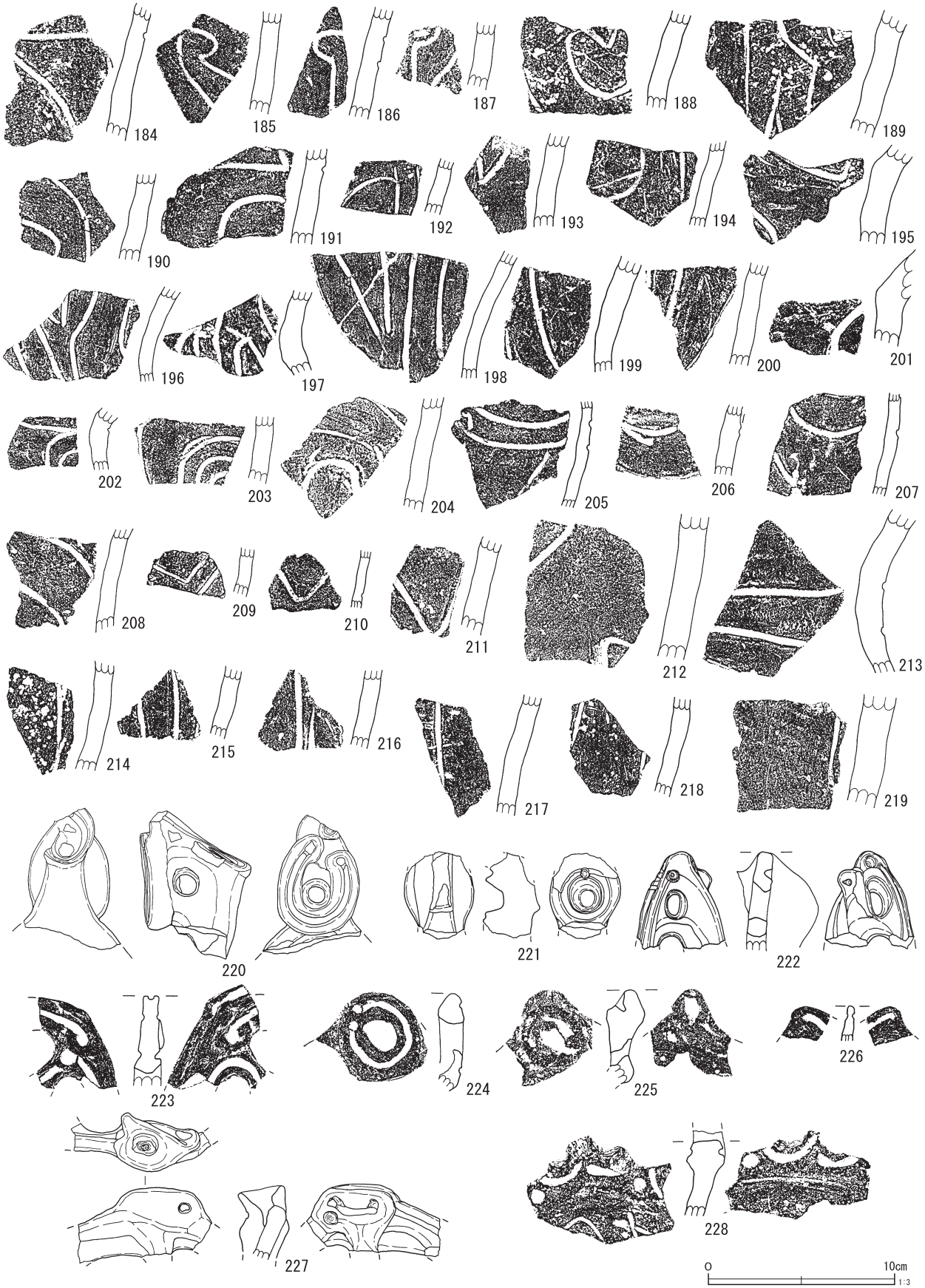
第20図　グリッド出土遺物（1）



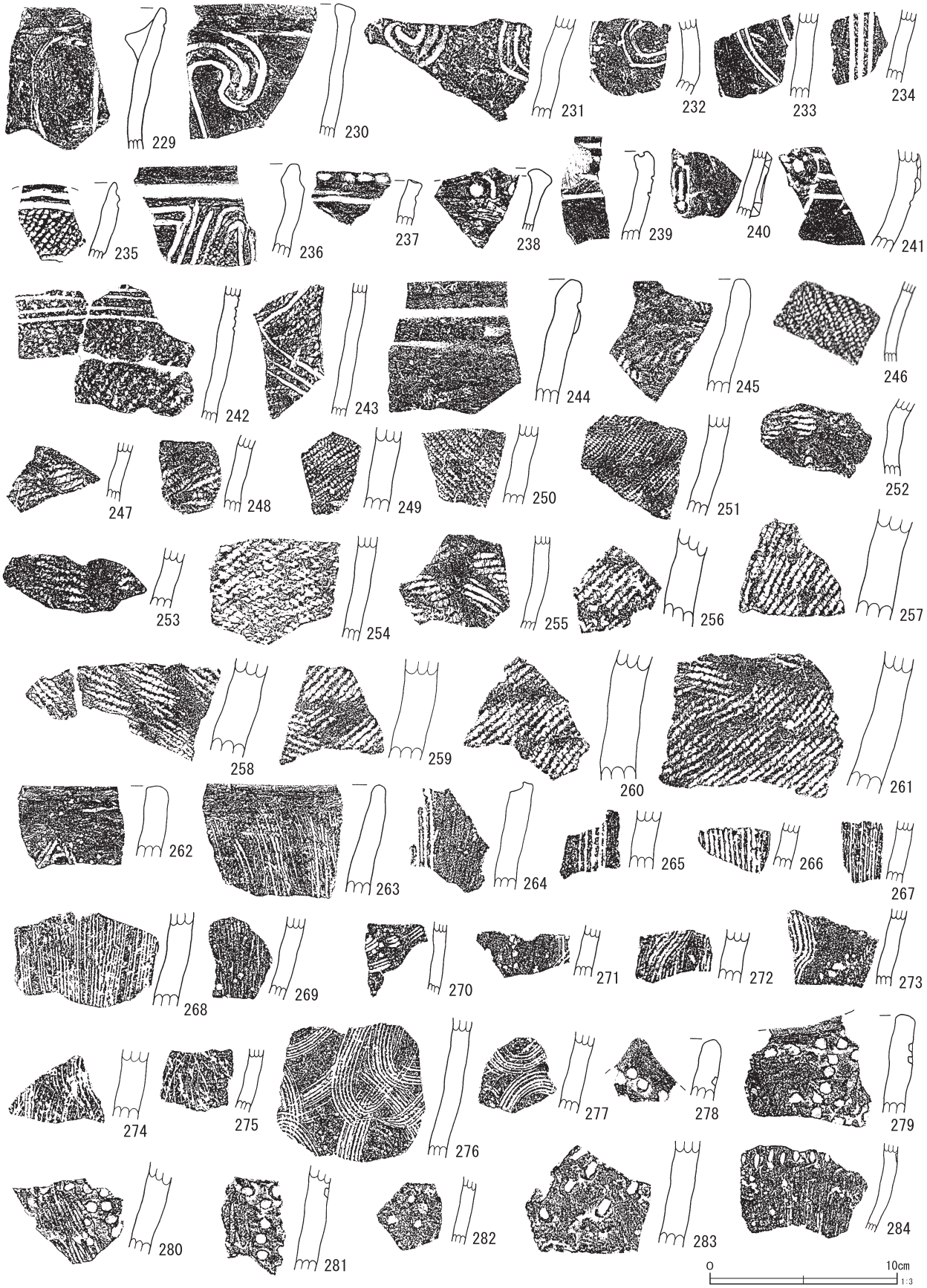
第21図　グリッド出土遺物（２）



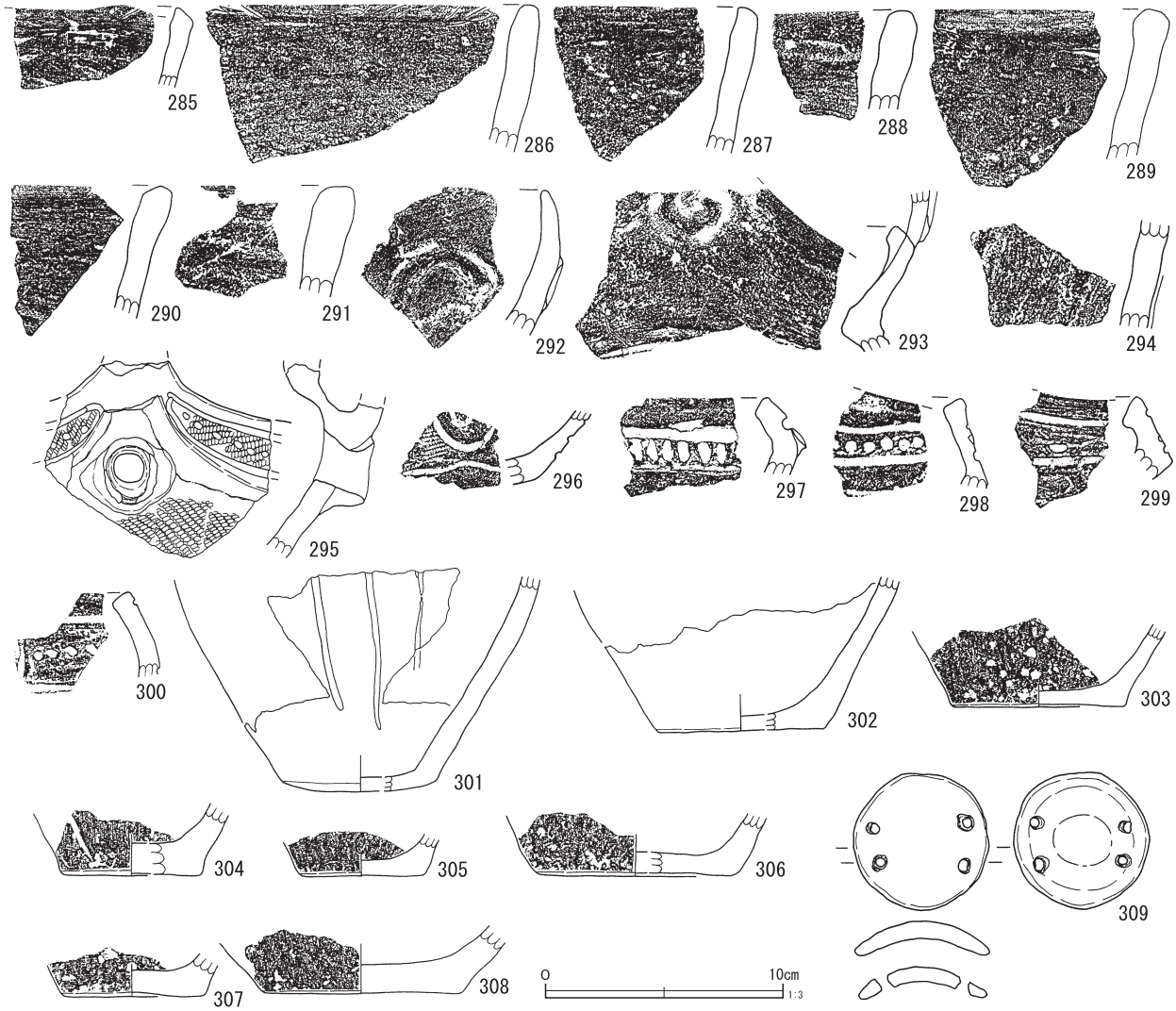
第22図　グリッド出土遺物（3）



第23図　グリッド出土遺物（４）



第24図　グリッド出土遺物（５）



第25図　グリッド出土遺物（６）

破片である。301は胴下半から底部の破片である。

第７類（第23図220～228）

把手部分の破片を一括する。第２～６類の胴部文様を持つ、深鉢形土器の把手部分がほとんどであると考えられるが、胴部の文様構成が不明のためここに一括した。220～225、227・228はＣ字文や円形貼付文、盲孔などを施文する綱取式系の把手部分である。225は把手に不定形な孔を穿ち、内面波頂部直下には盲孔を施文している。

第８類（第24図229～234）

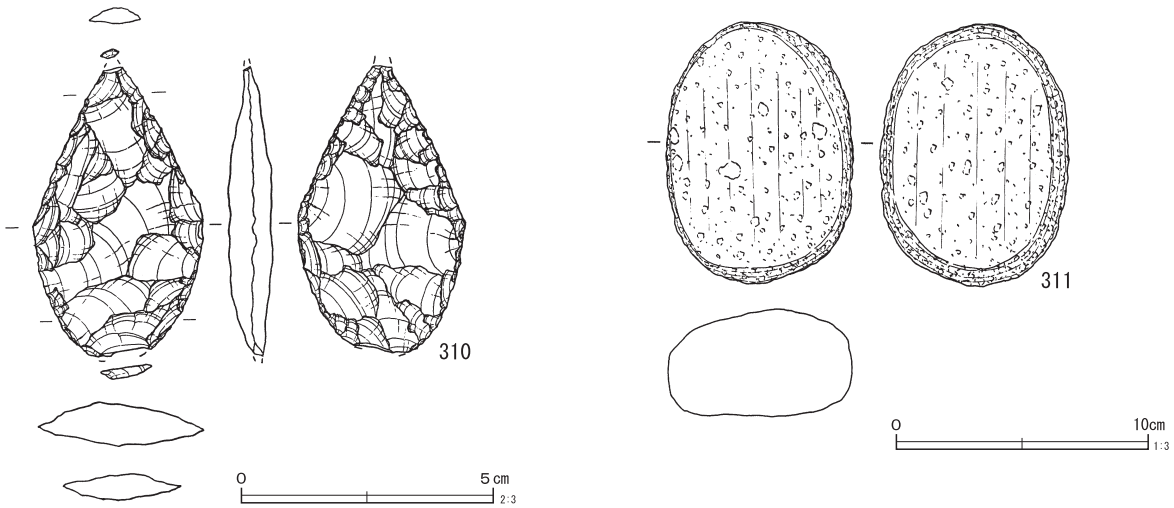
新しい様相を持つ土器群を一括した。230・234は３本沈線で文様を施文するもので、231～233は平行沈線文の幅が狭いものである。いずれも文様内は無文である。229は、内面に断面三角形状の突帯を巡らしている。

第Ⅰ群土器は、第１類は称名寺Ⅰ式、第２類～第８類は称名寺Ⅱ式土器に相当すると考えられる。

第Ⅱ群土器（第24図235～244）

後期前葉の堀之内式土器群を一括する。

235～241は、口縁部やその周辺の破片である。235・236・242・243は縄文を地文とするもので、沈線による文様を施文している。236は単節ＲＬの縄文、他は単節ＬＲの縄文を施文している。237・238・240・241は地文が施文されないもので、口縁部が開き頸部で括れる器形と考えられる。237は口唇部に押捺が加えられている。他は円形



第26図　グリッド出土遺物（７）

貼付文や円形刺突などが加えられている。239は口唇部に沈線を巡らし、帯状に施文された沈線文内には単節ＬＲの縄文を施文している。244は口縁部に隆帯と沈線文を巡らす無文の土器である。第Ⅱ群土器は、堀之内１式期に相当する。

第Ⅲ群土器（第24図245～291）

後期初頭から前葉の粗製の深鉢形土器群を一括する。

245～261は地文として縄文のみを施文する土器である。246は単節ＲＬ、247・252・255は無節Ｌ、他は単節ＬＲの縄文を施文している。

262～277は条線のみを施文する土器群である。櫛歯状の工具で条線を施文する土器が多い。

278～284は列点文のみを施文する土器である。

285～291は無文の土器である。

第Ⅳ群土器（第25図292～300、302～309）

その他の土器群を一括する。後期初頭から前葉の土器である。

292～294は微隆起状の隆帯によって文様を施文するもので、他は無文である。

295は注口付きの浅鉢形土器で、注口部直上には破損しているが、把手が貼付されている。屈曲する口縁部は沈線による区画文が施され、区画内には単節ＬＲの縄文が充填され、中央に列点文が１列施文される。胴部は縄文のみが施される。

296は鉢形土器で、底部周辺の破片である。器高は低く、口縁部が大きく開く器形であると考えられる。沈線文によって文様が施文され、文様区画内には単節ＬＲの縄文を充填している。器面には赤彩の痕跡が認められる。

297～300は浅鉢形土器で、屈曲する口縁部の破片である。

302～308は底部である。

309は蓋である。やや楕円形で、内面は湾曲し、長軸上に２穴対の円孔を穿っている。器面は無文で、内外面には擦痕状の調整痕が認められる。

出土石器

グリッドから出土した石器を一括する。

尖頭器（第26図310）

310は、刃部先端部と基部先端部を欠損するが、完形に近いやや幅広の尖頭器である。長さ5.7㎝、幅3.3㎝、厚さ0.9㎝、重さ16.6ｇで、石材は頁岩である。単独で検出されたもので、時期は縄文時代草創期または早期と考えられるが、その時期に相当する土器は検出されていない。

磨石（第26図311）

311は磨石である。側縁は面取りが施される。長さ10.4㎝、幅7.35㎝、厚さ4.35㎝、重さ388.5ｇ、石材は安山岩である。

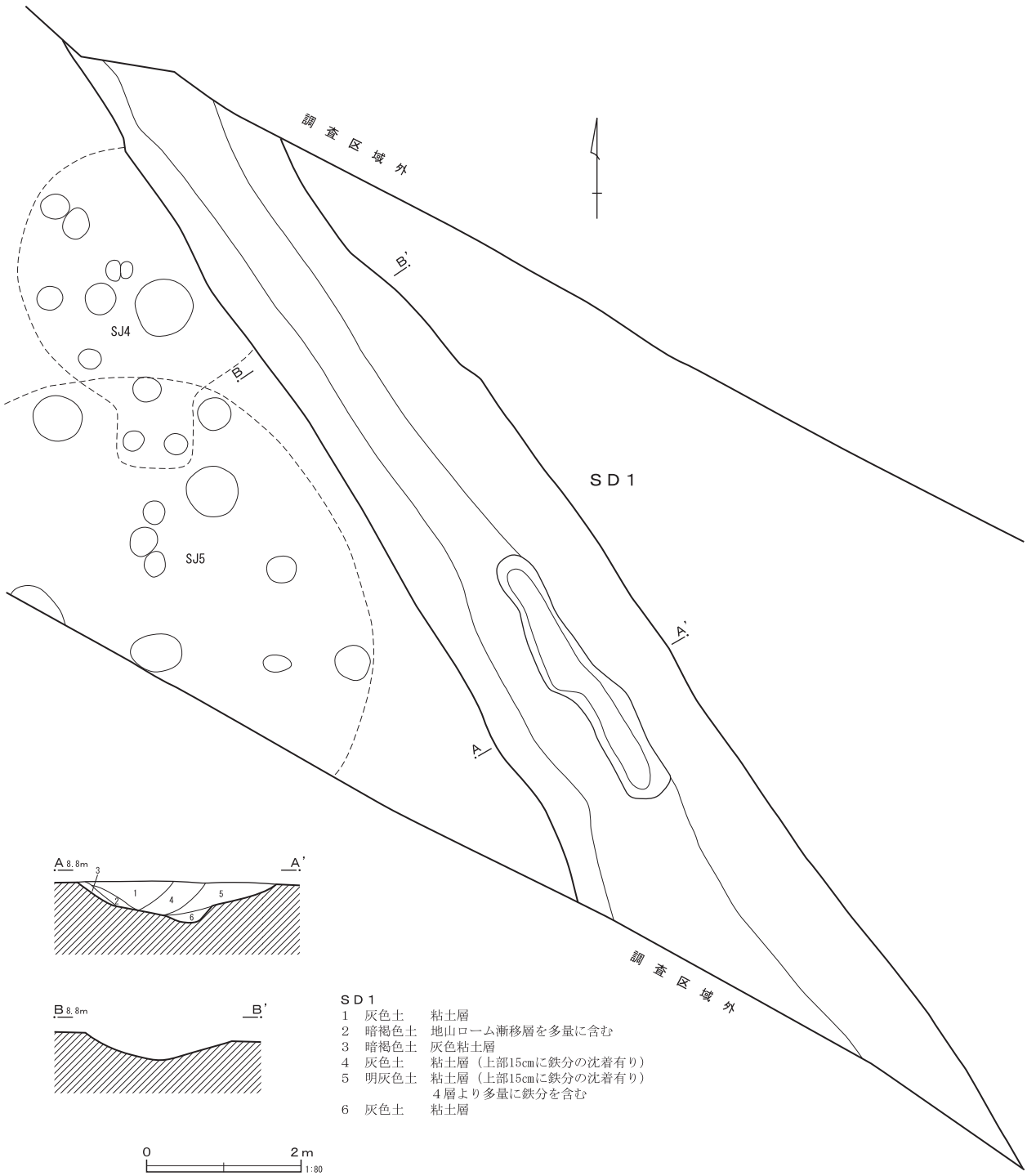
2．近世

（1）溝跡

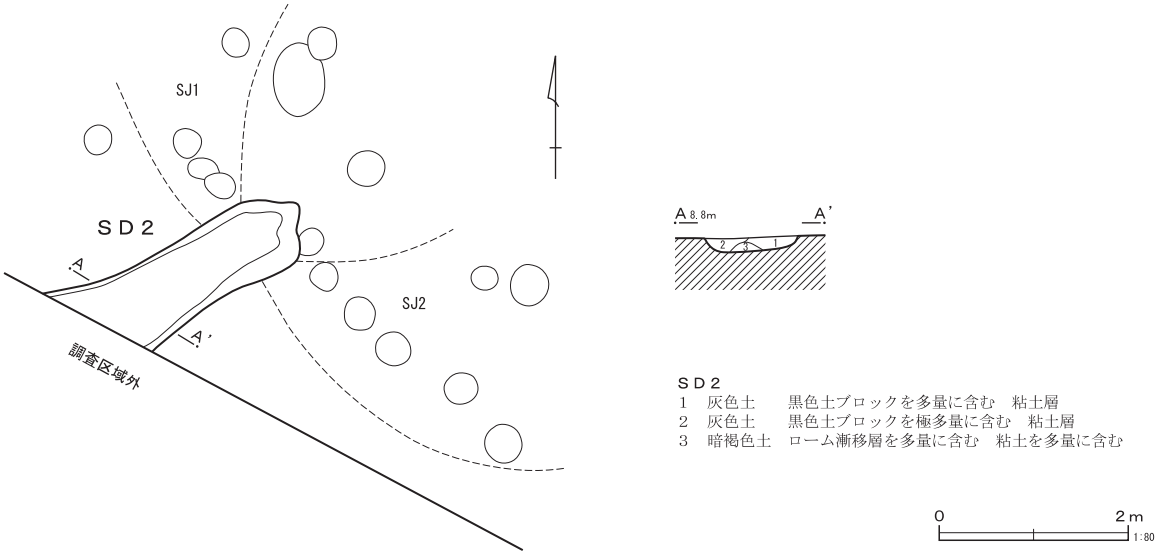
第１号溝跡（第27・29図）

調査区の中央部、Ｃ－５、Ｄ－５、Ｅ－５、Ｅ－６グリッドに位置する。軸方位はＮ－34°－Ｗで、調査区を北西方向に横断している。溝跡の幅は広い場所で1.8ｍ、狭い場所で2.6ｍである。深さは約0.42ｍで、横断面はレンズ状を呈している。また、底面の一部に窪みがある。

溝跡の覆土は、南西方向からローム層を含む暗



第27図　第１号溝跡



第28図　第２号溝跡

褐色土が、北東方向から灰色の粘土で埋まっている。

遺物は、陶磁器類と木製品が出土した。

１は磁器、伊万里系の染付碗である。文様は草花文で、残存率は口縁部30％である。時期は18世紀後半である。

２は磁器、伊万里系の染付碗である。文様は草花文で、残存率は底部のみである。時期は18世紀後半である。

３は磁器、伊万里系の染付瓶である。残存率は体下部25％である。時期は17世紀後半と思われる。

４は　器の擂鉢である。体部下半の小破片である。櫛目は重複が激しいが６本と思われる。

５は漆器の蓋である。内外面とも黒漆が塗られている。残存の径は11.0㎝、つまみ部径は5.4㎝、器高は1.2㎝である。

６は板材である。長さは46.4㎝、幅3.8㎝、厚さ0.8㎝である。

７は建築部材の一部と思われる板材である。大きさは、残存の長さ24.4㎝、幅8.0～8.7㎝、厚さ1.5㎝である。正面は平坦に加工しているが、裏面の加工は雑である。

８は杭である。大きさは、残存の長さ47.9㎝、長径4.7㎝、短径4.6㎝である。

９は杭である。大きさは、残存の長さ16.6㎝、長径2.4㎝、短径1.2㎝である。

10は不明木製品である。縦断面は湾曲している。正面は平坦に整形しているが、裏面は粗い加工痕をそのまま残している。大きさは、残存の長さ13.6㎝、幅6.2㎝、厚さ1.4㎝である。

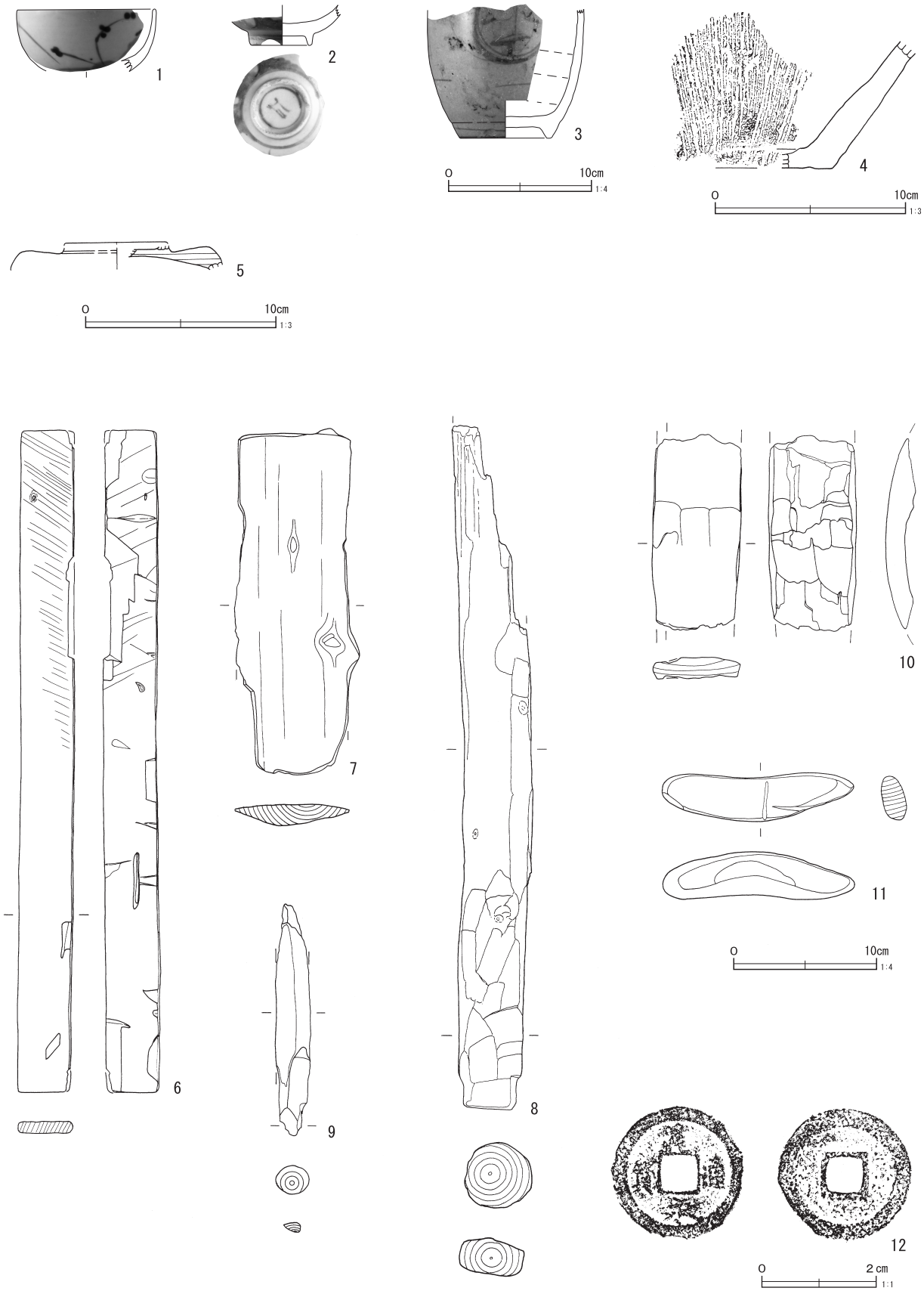
11は不明木製品である。大きさは長さ13.5㎝、幅3.2㎝、厚さ1.6㎝である。

第２号溝跡（第28図）

調査区の北西隅、Ｃ－３グリッドに位置する。軸方位はＮ－59°－Ｅである。溝跡の幅は0.85ｍ、深さは0.18ｍである。横断面は台形状を呈している。遺物は出土しなかった。

（２）グリッド出土遺物（第29図）

グリッドからは第29図12の古銭が１点出土したのみであった。12は寛永通寶（新寛永）である。



第29図　溝跡・グリッド出土遺物

V　調査のまとめ

1．調査の成果

上早見新田西遺跡は、久喜市大字上早見字新田に所在している。遺跡の周辺は、関東造盆地運動の影響で沈降して低地化した地域にあたる。そのため現在ではローム台地は埋没しており、一部が微高地状となって残存している。低地化は弥生時代以降とされていることから、縄文時代ではこの地域は、大宮台地と群馬県南部の館林台地とを繋ぐローム台地であったと考えられている。遺跡はそうしたローム台地の縁辺に立地していたと考えられる。

今回の調査では、縄文時代後期、近世の遺構・遺物を検出した。遺跡の中心となる時期は、縄文時代後期初頭である。検出遺構は、縄文時代後期初頭の住居跡５軒、縄文時代後期初頭から前葉の土壙13基、近世の溝跡２条である。

縄文時代後期においては、遺跡が立地する同じローム台地上では、反対の北東側の台地縁辺から数多くの遺跡が検出されている。それと比較すると、上早見新田西遺跡が立地する南西側は、遺跡の分布は希薄である（第２図）。今回、後期初頭の集落が検出されたことは、台地南西側の遺跡が縁辺に立地している場合、埋没しているため検出されていない可能性が高いことを示している。

大宮台地上では、中期末葉から後期初頭になると、分散化した小規模な集落が台地の縁辺部に形成される傾向にあると指摘されている（金子2006・2007）。上早見新田西遺跡周辺も、同様の傾向を示している可能性が高く、今回の調査は遺跡の分布を考える上で大きな成果を上げることができたといえる。

2．縄文時代後期初頭の出土土器について

調査区内からは、縄文時代後期初頭から前葉の土器群が検出され、そのほとんどが後期初頭の称名寺式土器であった。遺構内、外で出土した称名寺式土器には、大きな時期差は認められなかった。そこでここでは、遺構出土土器を中心に、検出された称名寺式土器の時間的な位置付けについて考えていきたい。

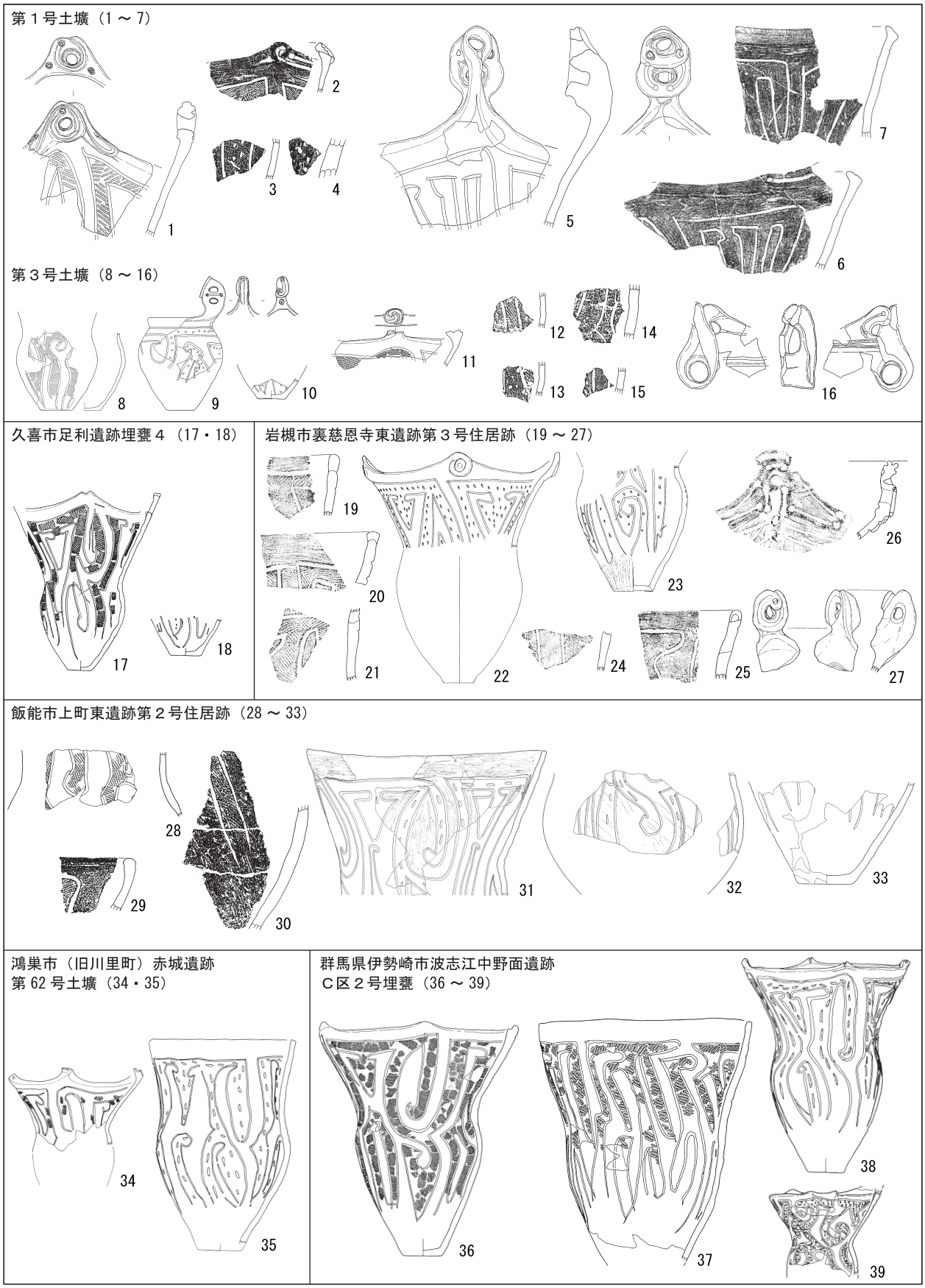
遺構出土土器としては、住居跡からは小破片が検出されたのみであるため、第１号土壙、第３号土壙出土土器を中心に考えていくこととする。

第30図１～７は第１号土壙から検出された土器である。１・２は、文様内に縄文を充填するもの、３・４は列点文を、５～７は無文のものである。１や５など、波状口縁の波頂部に綱取系の把手を貼付する土器が含まれる。文様端部は、胴部下半の破片（第16図）から、開放され懸垂文状となっている。

第30図８～16は第３号土壙から検出された土器である。８・11～13は文様内に縄文を、９・10・15は文様内に列点文を充填し、14は無文である。16は注口部分である。９など口縁部に綱取系の把手を持つ土器が含まれている。文様の端部は開放され懸垂文状となっている。

第１・３号土壙出土土器の共通する特徴は、文様内充填が縄文充填の他、列点文や無文の土器が出土すること、文様の端部が開放されること、綱取系の把手などがあげられる。文様内には数は少ないものの、条線を充填する土器も検出されている。縄文、条線、列点、無文の比率に差はあるものの、他の遺構出土土器も特徴はほぼ共通している。また、グリッド出土土器の称名寺式土器についても同様であった。

次に、これらの特徴を持つ、土器群が称名寺式土器のなかで、どの段階に相当するかを他の遺跡



第30図　後期初頭の土器群

出土土器と比較し、考えてみたい。

称名寺式土器の細分については、鈴木徳雄氏が、「称名寺式にかんする交流研究会」において７段階の変遷案を示し（鈴木1985）、以降７段階の変遷について検討されてきた。第20回縄文セミナーにおいて、第１段階はⅠa式、２段階・３段階はⅠｂ式、４段階・５段階はⅠｃ式、６段階・７段階はⅡ式として７段階に細分されている（鈴木2007）。

この６段階の土器群として、岩槻市裏慈恩寺東遺跡第３号住居跡（第30図19～27）、飯能市上町東遺跡第２号住居跡（第30図28～33）、鴻巣市（旧川里町）赤城遺跡第62号土壙（第30図34・35）が挙げられている（鈴木2007）。

裏慈恩寺第３号住居跡からは、文様内に縄文充填（19～21）、列点（22・23）、条線（24）、無文（25）の土器、綱取系の把手（27）が検出されている。また上町東遺跡第２号住居跡からは、文様内に縄文充填（28～30）、列点（31・32）、無文（33）の土器が検出されている。

この６段階の土器群は、縄文充填が少なくなり、列点文が一般的になるとされている。上早見西遺跡では列点文主体というよりも、文様内の地文充填が、縄文、列点文、条線、無文とバリエーションが増えた様相を示している。また、綱取系の立体的な把手が伴うことも特徴の一つである。

地文充填の変異については、６段階の時期の久喜市足利遺跡埋甕４（第30図17・18）、赤城遺跡第62号土壙、群馬県伊勢崎市波志江中野面遺跡Ｃ区２号埋甕（第30図36～39）出土の、同時性の高い土器の組み合わせからも指摘できる。これらの土器は、縄文充填と列点文のセットとなって出土している。このことから、６段階においては縄文充填が減少したのではなく、地文充填の変異が増加する段階と考えることもできる。

これら土器群との比較から、第１号土壙、第３号土壙出土の土器群は、特徴からすると６段階に相当すると考えられる。しかしながら、６段階資料の検討は、県内では良好な一括資料が少ないことや、加曽利Ｅ式系土器や綱取系土器との関係が不明な点も多いことから、周辺地域との比較も含め、今後の課題としたい。今回は上早見新田西遺跡における土器群の特徴を、６段階のものとして捉えておくこととしたい。

以上のように、上早見新田西遺跡の遺構出土の称名寺式土器群は、文様構成や充填文の要素等から称名寺式土器の６段階、称名寺Ⅱ式土器に相当すると考えられる。

引用・参考文献

金子直行　2006「縄文中期型環状集落解体への序章ー「時（クロノス）」としての土器からみた「場（トポス）としての集落変遷ー」『ムラと地域の考古学』同成社

金子直行　2007「縄文中期型環状集落の解体過程からみた縄紋社会―複雑系科学の視点から―」『縄紋社会をめぐるシンポジウムⅤ縄紋社会の変動を読み解く予稿集』縄紋社会研究会・早稲田大学先史考古学研究所

久喜市史編さん室編　1989『久喜市史　資料編。考古　古代・中世』久喜市

久喜市史編さん室編　1992『久喜市史　通史編　上巻』久喜市

鈴木敏昭他　1980『足利遺跡』久喜市埋蔵文化財調査報告書　久喜市教育委員会

鈴木徳雄　1990「称名寺式土器」『調査研究集録』第７冊　横浜市埋蔵文化財センター

鈴木徳雄　2007「称名寺式土器研究の諸問題」『中期終末から後期初頭の再検討』第20回縄文セミナー

角田芳昭　2002『波志江中野面遺跡（2）ー縄文時代編ー』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書　第296集

並木　隆　1978『裏慈恩寺東遺跡』埼玉県遺跡調査会報告書　第33集

橋本　勉　1988『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第74集

渡辺清志　2006『上町東／旭原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第324集

写真図版

1　調査区全景（西から）

2　第 1 号住居跡

図版 2

1　第 2 号住居跡

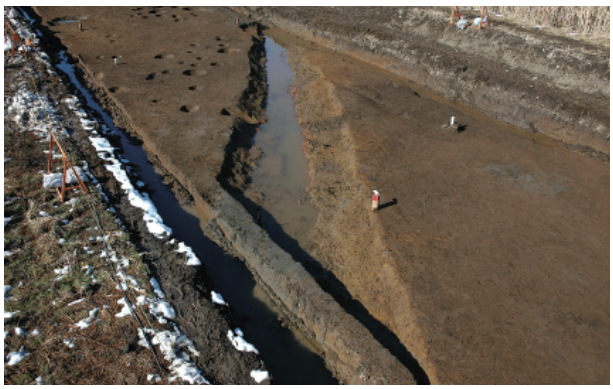
2　第 3 号住居跡

1　第 4 ・ 5 号住居跡

2　第 3 号土壙

4　第 13 号土壙

3　第 10・11・12 号土壙



5　第 1 号溝跡

図版 4

1　第１号土壙出土遺物（第 16 図 13）

2　第２号土壙出土遺物（第 18 図１）

3　第２号土壙出土遺物（第 18 図２）

4　第３号土壙出土遺物（第 18 図７）

5　第３号土壙出土遺物（第 18 図８）

6　グリッド出土遺物（第 25 図 309）

1　第 1・2 号住居跡出土遺物

2　第 3 号住居跡出土遺物

図版 6

1　第４・５号住居跡出土遺物

2　土壙出土遺物（１）

1　土壙出土遺物（2）

2　土壙出土遺物（3）

図版 8

1　グリッド出土遺物（1）

2　グリッド出土遺物（2）

1　グリッド出土遺物（3）

2　グリッド出土遺物（4）

図版 10

1　グリッド出土遺物（5）

2　グリッド出土遺物（6）

1　グリッド出土遺物（7）

2　グリッド出土遺物（8）

図版 12

1　溝跡・グリッド出土遺物

報告書抄録

ふりがな	かみはやみしんでんにしいせき
書名	上早見新田西遺跡
副書名	地特（改築）工事（六万部久喜停車場線）関係埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書
シリーズ番号	第368集
編著者名	西井幸雄
編集機関	財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒369－0108　埼玉県熊谷市船木台四丁目４番地１　　TEL 0493－39－3955
発行年月日	西暦2010（平成22）年１月29日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
かみはやみしんでんにしいせき 上早見新田西遺跡	さいたまけんくきし 埼玉県久喜市 おおあざかみはやみあざ 大字上早見字 しんでんほか 新田489－18他	11232	054	36°04′15″	139°39′24″	20080104～ 20080215	882	道路整備

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上早見新田西遺跡	集落跡	縄文時代 後期	竪穴住居跡　５軒 土壙　13基	縄文土器・石器	
		近世	溝跡　２条	陶磁器・木製品	

要約

上早見新田西遺跡は久喜市に所在している。久喜市は加須低地に属し、関東造盆地運動の影響を受けて市域全体が沈降しているため、現在、遺跡は台地裾部のおよそ標高９ｍ前後の沖積地に存在している。

今回の調査では、縄文時代後期初頭の竪穴住居跡が５軒、後期初頭から後期前葉の土壙が13基、近世の溝跡２条が検出された。縄文時代の遺構からは、称名寺式土器が主に検出された。竪穴住居跡は、炉跡とピットのみが検出されたが、住居の掘り込みは確認されなかった。また、土壙のうち２基は袋状の形状を呈したもので、覆土からは多くの称名寺式土器が検出された。

遺跡の発見が困難な沖積土に覆われたローム台地において、縄文時代後期初頭の集落が検出されたことは、周辺地域の縄文時代の様相を知るうえで大きな成果と言える。

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第368集

上早見新田西遺跡

地特（改築）工事（六万部久喜停車場線）関係
埋蔵文化財発掘調査報告

平成22年１月24日　印刷
平成22年１月29日　発行

発行／財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
〒369－0108　熊谷市船木台四丁目４番地１
電話　0493（39）3955
http://www.saimaibun.or.jp

印刷／巧和工芸印刷株式会社